

国立国語研究所学術情報リポジトリ

<全文>日琉諸語の記述・保存研究III

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0002000469

日琉諸語の記述・保存研究Ⅲ

編集

大島 一、セリック・ケナン、五十嵐陽介、山田真寛

2025 年 1 月

国立国語研究所

目次

令和5年度 第2回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会	3
令和6年度 第1回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会	7
【プロシーディング】理由の接続助詞と終助詞・間投助詞の接続 ——首都圏・熊本・倉吉方言を対象に—— 阪上 健夫	11
【プロシーディング】白山麓方言の授与動詞体系 松倉 昂平	26
【プロシーディング】文焦点（Thetic）文における主題標示とその条件の再検討 ——宮崎県椎葉村尾前方言を中心に—— 廣澤 尚之	37
【プロシーディング】北琉球沖縄語伊平屋方言の疑問文の構造とイントネーション カルリノ・サルバトーレ	53
【プロシーディング】宮古語大神島方言の助辞 <i>kami</i> と <i>ta:si</i> のふるまい ——助辞 <i>kami</i> の意味の拡張をめぐる—— 金田 章宏	64

「消滅危機言語の保存研究」「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多 様性解明のための実証的研究」合同研究発表会

プロジェクト名 「消滅危機言語の保存研究」「日本語・琉球語諸方言におけるイン
トネーションの多様性解明のための実証的研究」

リーダー名 山田真寛（研究系・准教授），五十嵐陽介（研究系・教授）

開催期日 2024 年 3 月 17 日（日） 10：00～15：40

開催場所 国立国語研究所多目的室およびオンライン（Zoom ミーティング）

※Zoom 参加をご希望の方は、事前登録フォーム

（<https://zoom.us/meeting/register/tJEude2urzMsHd1uVts5bcXx5c9mTLaK1N60>）か
らお申し込み下さい（登録後に Zoom 会議の URL と会議 ID、パスワードが届きます）。

※Zoom での研究会の様子は録画します。

問い合わせ先：h-oshima@ninjal.ac.jp

令和 5 年度 第 2 回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会

趣旨

2022～2028 年度に行う日琉語諸方言の保存研究と、日琉語諸方言のイントネーション研究プロジェクトの共同研究員による研究発表会です。プロジェクト 2 年目の第 2 回目の今回は両プロジェクトの共同研究員による音声および文法に関する様々な研究発表を行います。

プログラム

10:00～10:40

研究発表「北琉球沖縄語伊平屋方言のイントネーション」

サルバトーレ・カルリノ（大東文化大学）

要旨

本発表では沖縄語伊平屋方言のイントネーションについて述べる。まず、文タイプで見られるイントネーションの実現を記述する。そして焦点、統語構造とイントネーションの関わりについて述べる。

10:40～11:20

研究発表「八重山語の韻律体系」

セリック・ケナン（国立国語研究所）

要旨

本発表では、調査研究の最新の成果に基づき、八重山語諸方言の韻律体系の特徴を概観し、方言間のバリエーションを説明するための変数を整理する。まず、共通点として、八重山語のほとんどの方言では音節より上位、文節下位の韻律単位（いわゆる「韻律語」）が数えの単位として機能しており、ピッチ変動の有無と位置（1 番目か 2 番目の韻律語）によって少なくとも 3 つのアクセント型（a 型、b 型、c 型）が区別されている。次に、方言間のバリエーションを捉えるためには、ピッチ変動の方向（上昇か下降）、韻律語内におけるピッチ変動の実現位置（次末音節か末尾音節）、b 型をめぐる中和現象（アクセント実現型、アクセント浮遊型、アクセント実現とアクセント浮遊の共存型）、語の長さによる対立数の制約の有無（単純語・複合語三型、単純語二型・複合語三型）の変数が必要であることを示す。それに加えて、語頭分節音の有性声を条件とした声調派生（波照間・白保方言）や、語末母音を条件とした声調派生（西表西部諸方言）の結果によって新しく生じたアクセント型の対立も見られる。以上を踏まえて、通時的な観点から八重山語の韻律体系が経験している変化の方向性について簡単に述べる。

11:20～11:30 休憩

11:30～12:10

研究発表「白山麓方言の授与動詞体系」

松倉昂平（金沢大学）

要旨

本発表では福井県大野市上打波方言の授与動詞体系の記述を行う。上打波地区は大野市の北東部にあり石川・岐阜県境に接する白山麓の山村で、同じく白山麓にある石川県白峰方言や富山県五箇山方言との間には語彙・文法面で多くの共通点がみられる。授与動詞体系の類似もその一つで、例えばクレルに視点制約がない（求心的授与にも遠心的授与にも使われる）点も 3 方言の共有特徴である。イクス（共通語の「寄越す」に対応）も五箇山と上打波では視点制約がなく両方言ともに特殊かつ類似の補助動詞用法を有する。上打波ではヤル、クレル、イクスの 3 語に加えて、様々な待遇語（クレルの尊敬語にあたるオグレル、タモルや、クレルの軽卑語にあたるカスなど）の使い分けも問題となる。

特に五箇山方言の授与動詞に関しては詳細な記述が残されており（日高 1994, 2007 など）、先行研究（五箇山方言）と対照する形で、上打波方言の記述・分析を行っていく。

12:10～13:30 昼休み

13:30～14:10

研究発表「動詞接辞を中心とした高知方言の TAM 体系」

中澤光平（信州大学）

要旨

本発表では、高知県高知市および南国市での発表者による現地調査で得られたデータに基づき、高知方言（高知市方言、南国市方言）のテンス・アスペクト・モダリティ体系について、動詞接辞を中心に形式と意味の整理を行う。とりわけ、次の点に焦点をあてて論じる。

- ・「ユー／チュー」の意味
- ・とりたて形
- ・他方言との比較対照

14:10～14:50

研究発表「理由の接続助詞と終助詞・間投助詞の接続—首都圏・熊本・倉吉方言を対象に—」

阪上健夫（東京大学大学院人文社会研究科博士課程）

要旨

理由の接続助詞が文末で使用される場合、終助詞に近い用法がある。熊本方言や鳥取県倉吉方言の理由の接続助詞には、首都圏方言で「から」が用いにくく終助詞を用いた方が自然な文末用法がある。これは、接続助詞の終助詞化の程度に方言差があることを意味する。また、文末における接続助詞と終助詞の接続には、文中での間投助詞との接続とは異なる現象が見られる。本発表では、首都圏・熊本・倉吉方言話者を対象とした面接質問調査の結果にもとづき、これらの方言における理由の接続助詞の文中用法と文末用法の間の接続関係の異同を明らかにする。例えば、熊本方言では文中の場合「タイ」が間投助詞として理由の接続助詞に後続し得るが、文末では専ら「ネ」の類の終助詞が後続する。そして文末用法の場合は、「ヨ」「バイ」「タイ」が使われる形態統語環境で理由の接続助詞が使われ得る。ここから、文末で使われる理由の接続助詞は「ヨ」「バイ」「タイ」といった終助詞と範列的な対立関係にあることを主張する。

14:50～15:00 休憩

15:00～15:40

研究発表「宮古語大神方言 助辞カミとターシのふるまい」

金田章宏（千葉大学名誉教授）

要旨

宮古語大神方言の助辞カミとターシには日本語のマデと同様、格ととりたての用法がみられるが、カミにはそれ以外の興味深い用法がみられる。焦点化助辞トゥに類似した用法とのべたて文をはたらきかけ文に変える用法である。格ととりたての用法は大神方言以外の宮古語諸方言にもみられるようだが、それ以外の2つの用法については確認できていない。

「消滅危機言語の保存研究」「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」合同研究発表会

プロジェクト名 「消滅危機言語の保存研究」「日本語・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」

リーダー名 山田真寛（研究系・准教授），五十嵐陽介（研究系・教授）

開催期日 2024年6月15日（土） 10：00～16：00

開催場所 国立国語研究所多目的室およびオンライン（Zoom ミーティング）

※参加（対面 or オンライン）をご希望の方は、6月13日（木）までに事前登録フォーム（<https://forms.gle/W1JmkNFZhNFXFR2P6>）からお申し込み下さい。後日、それぞれの参加方法の詳細をメールにてお送りします。

※Zoomでの研究会の様子は録画します。

問い合わせ先：h-oshima@ninjal.ac.jp

令和6年度 第1回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会

趣旨

2022～2028年度に行う日琉語諸方言の保存研究と、日琉語諸方言のイントネーション研究プロジェクトの共同研究員による研究発表会です。プロジェクト3年目の第1回目の今回は両プロジェクトの共同研究員による言語復興および、文法や音声、方言コーパスに関する様々な研究発表を行います。

プログラム

10:00～10:40

研究発表「八重山語の再生：イデオロギーと実践の学際的探究」

マシュー・トッピング（国立国語研究所）

要旨

本研究は、参加型アクション・リサーチ（PAR）の方法論を適用した質的実践研究である。パーソナルインタビューおよび消滅危機言語継承活動の観察を通して沖縄県石垣市の2つの地域において、八重山地方の継承言語である八重山語「ヤイマムニ」の四箇方言「シウカムニ」に対して研究協力者が持つ言語イデオロギーと活動の実践方法を紹介する。継承活動として協力者は「マスター・アプレンティス語学学習」（MA）という消滅危機言語再活性化の手法を応用している。また、PARは社会科学研究の協調性を強調するため、本研究の方法論として採用した。本発表では具体的に(1)八重山

語とその消滅危機の現状，(2)MA の特徴，(3)データ収集・分析方法と(4)石垣市での活動の背景および主なインパクトを順番に焦点をあてて論ずる。

10:40～11:20

研究発表「沖永良部語復興 can-do リスト作成の試み―「島むにサロン」参加者とのブレインストーミングに基づいて」《オンライン発表》

岩崎典子（南山大学），高 智子（独立行政法人国際交流基金関西国際センター）

要旨

言語使用者がその言語で「何ができるか」のレベル別の例示記述文である can-do statements（以下「can-do」）を含むヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）が言語教育などに広く援用されている。本発表では，沖永良部語（以下，「島むに」）の学習カリキュラム構築や独学のセルフチェックの際に役立つよう，発表者らが作成を手がけ始めた沖永良部語復興 can-do リストについて報告する。まず，島むにを身近に感じて復興を願うコミュニティメンバーが月 1 回集う「島むにサロン」で第 1 回のブレインストーミングを行い，メンバーが（自分，若い世代，子どもたちが）島むにを使って何ができることを望むのかを聞き出し，can-do を抽出してリストを作成し，CEFR 等を参照して言語運用能力のレベル分けを行なっている。言語運用能力には，CEFR が扱う「理解」「産出」「やりとり」「（文化・言語間の）仲介」の能力の他に，言語復興に有用な能力として，相手の島むにの知識に合わせて島むにを部分的に使う「混成」の能力を加えることにした。

11:20～12:00

研究発表「コミュニティの主体的な記録保存と継承保存の例」

山田真寛（国立国語研究所），横山晶子（国立国語研究所）

要旨

消滅危機言語の記録保存も継承保存も，持続可能なものにするためには地域言語コミュニティメンバーが主体となる取り組みが不可欠である。本発表では沖永良部島の 2 つのプロジェクト（三世代参加プロジェクトと公民館講座）を例に，それぞれの概要，アウトプット，アウトカムを報告し，コミュニティの主体性を奨励する方法について議論する。

12:00～13:10 昼休み

13:10～13:50

研究発表「宮古語諸方言における複数形式に関する継続調査―類型化に向けて―」

大島 一（国立国語研究所），セリック・ケナン（国立国語研究所）

要旨

本発表は、昨年度から実施している宮古語諸方言における名詞の複数形式の継続調査の結果を報告するものである。今回の発表では、宮古語各地点における複数形式関連の類型化に向けて、以下の2点を中心に論じる。

第一に、宮古語のどの地点も少なくとも2つの複数形式、すなわち、名詞階層性の高い名詞に付く形式と、名詞階層性の低い名詞に付く形式を有している。しかし、名詞階層性においてこれら2つの形式が付き得る範囲が方言によって大きく異なる。基本的に、複数形式の付与がヒト名詞に限定される方言と、複数形式の付与がどの名詞でも可能な方言がある。第二に、複数形式がどの非ヒト名詞でも付与できる場合は、方言間で意味的機能の違いが観察された(①累加、②集合的例示、③Distributive(多種の構成員)など)。

13:50～14:30

研究発表「文焦点(Thetic)文における主題標示とその条件の再検討：宮崎県椎葉村尾前方言を中心に」

廣澤尚之(九州大学大学院人文科学府博士後期課程)

要旨

宮崎県椎葉村尾前方言は主題助詞「ワ」を持つが、その分布は標準語より広く、特にいわゆる文焦点(Thetic)文の一部で主語に主題助詞が現れうことは注目に値する。発表者はこれまで、①主語が文脈に既出のとき、②存在(Presentational)ではなく出来事を表す(Event-reporting)文のとき、という2つの条件を挙げ、①、②いずれかの条件を満たすとき、文焦点文でも主語に主題助詞が現れうると記述してきた。

本発表では、直近のフィールドワークに基づき、上記の記述を2点修正する。まず、条件①を満たしていないにも関わらず主題助詞が認められる特殊な文脈があることを報告する。次に、②によって主題助詞が出現するためには述語にアスペクトの制限があることを示す。

最後に、他方言でも同様のデータがあることを紹介し、これらの現象の情報構造上の位置付けについて考察する。

14:30～14:40 休憩

14:40～15:20

研究発表「北琉球沖縄語伊平屋方言の疑問文の構造とイントネーション」《オンライン発表》

サルバトーレ・カルリノ(大東文化大学)

要旨

本発表では沖縄語伊平屋方言の疑問文の構造とイントネーションの実現について概観する。まず疑問詞疑問文で使われる疑問語と、共起する形式を概観する。次にY/N疑問文で現れる、疑問を現す形式を概観する。次にそれぞれの疑問文のタイプのイントネーションの実現を概観し、日琉諸語及び世界の言語の疑問文イントネーションの言語類型論的位置づけについて検討する。

15:20～16:00

研究発表「九州方言における動詞ラ行音節の実現について－日本語諸方言コーパスに基づいた調査報告－」

佐藤久美子（国立国語研究所）

要旨

日本語の自然談話では、子音/r/を含む音節（以下、ラ行音節）が撥音化・促音化することがある（「ワカンナイ」分からない、「クッカラ」来るから、等）。このような現象は全国に広く観察されるが、頻度や環境は方言によって異なることが部分的に指摘されている。本発表では日本語諸方言コーパス（Corpus of Japanese Dialects: COJADS）を用いて、九州方言の自然談話データにおいて動詞ラ行音節がどのように実現するかを調査し、その実態を報告する。具体的には、以下の三つを指摘する（i）撥音、促音、長音が観察される（ii）それぞれの有無と頻度は地域間で大きく異なっている（iii）福岡方言と熊本方言では、音交替が生じる環境に他方言に見られない特徴がある。

理由の接続助詞と終助詞・間投助詞の連接

——首都圏・熊本・倉吉方言を対象に——

阪上健夫

東京大学大学院 博士課程／国立国語研究所 共同研究員

要旨

理由の接続助詞の文末用法には、終助詞に近いものがある。熊本県方言や鳥取県倉吉方言の理由の接続助詞には、首都圏方言で「から」が用いにくく終助詞を用いた方が自然な文末用法がある。これは、接続助詞の終助詞化ないし理由節の主節化の程度に方言差があることを意味する。また、文末における接続助詞と終助詞の連接には、文中での間投助詞との連接とは異なる現象が見られる。本稿ではこの連接に重点を置いて、首都圏・熊本・倉吉方言話者を対象とした面接質問調査の結果にもとづき、これらの方言における理由の接続助詞の文中用法と文末用法の間の連接関係の異同を明らかにする。例えば、熊本県方言では文中の場合「タイ」が間投助詞として理由の接続助詞「ケン」に後続し得るが、文末では専ら「ネ」の類の終助詞が「ケン」に後続する。このことから、文末用法の「ケン」は終助詞「ヨ」「バイ」「タイ」と範列的な対立関係にあることを主張する。*

キーワード：熊本方言，倉吉方言，接続助詞，間投助詞，終助詞

1. はじめに

首都圏方言において、理由の接続助詞は(1)のように文末で使われることがある。加えて、熊本県方言の理由の接続助詞「ケン」や鳥取県倉吉方言の理由の接続助詞「ケー」には、首都圏方言で「から」が用いにくく「よ」の方が自然な文末用法がある。(2)(3)のような例である。

- (1) (会合等で退出する際に) じゃあ、私はこの辺で帰るから。【首都圏方言】
- (2) (雨に気づき知らせる時) あら、雨の降りよるケン。¹【熊本方言】(和田 2009)
- (3) (布団の上に乗る子供に腹が立って) ほおんに 腹がわりいけえ。【倉吉方言】(小矢野 2017)

これは、接続助詞の終助詞化ないし理由節の主節化の程度に方言差があることを意味する。この接続助詞の終助詞化ないし理由節の主節化には、(4)に挙げる2つの要素がある。

* 本研究にご協力くださった山田高明先生・桑本裕二先生および方言話者の方々、並びに方言話者を紹介してくださった坂井美日先生・野間純平先生に深く感謝を申し上げる。本研究は JSPS 科研費 17K02777, 21K18376, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」(プロジェクトリーダー：山田真寛) の助成を受けている。

¹ 例文を引用する場合は基本的に分かち書き等を出典のままにしている。

(4) ①用法・意味

②終助詞・間投助詞との接続関係

①は接続助詞の意味に関わる要素で、②は他の形式との共起関係を表すため接続助詞の形式に関わる要素である。2.2 節で述べるように、阪上（2023）は①の用法・意味の側面から熊本県方言の「ケン」を記述・考察したが、本稿では②の接続関係に重点を置く。

理由の接続助詞が文末で使用される場合、（5）のように終助詞が接続することがある。

(5) 遅くに出かけてお化けに会っても知らないからね。【首都圏方言】

この文末用法の「から」と終助詞の接続には、文中用法の「から」と間投助詞の接続と異なる現象が見られる。例えば文中用法の場合は（6）のように「さ」が後続できるが、文末用法では「さ」が後続しにくい場合がある。（5'）のように「からさ」を用いると不自然になる。これは、「さ」が後続すると終助詞ではなく間投助詞に見えるが、後に続く内容が考えにくいためだと思われる。

(6) 地面が濡れているからさ、雨が降ったんだろうね。【首都圏方言】

(5') ?遅くに出かけてお化けに会っても知らないからさ。【首都圏方言】

また、接続助詞の文末用法の分類は、白川（2009）が言語形式的に主節が表現されないものを「言いさし」としている。加えて、言いさしの中でも「ご飯が美味しいね。」という発話に対する「今日はよく働いたから。」のように、文脈の中に主節として関係付けられる内容があるものは「関係付け」とする。一方、文脈中に主節相当の内容が見出しにくい「ちょっと煙草買ってくるから。」のような用法は、それだけで意味的に完結する「言いつくし」とされている。本稿では白川（2009）で「言いつくし」とされているような文末用法を考察対象とする。

方法としては首都圏・熊本・倉吉方言話者を対象とした面接質問調査の結果にもとづき、これらの方言における理由の接続助詞の文中用法と文末用法の間の接続関係の異同を明らかにする。次節では理由の接続助詞の文末用法や終助詞・述部のモダリティ構造に関する先行研究を示し、第3節で調査方法を述べ、第4節で調査結果を示す。第5節ではそれに基づいて首都圏方言の「カラ」、熊本県方言の「ケン」、倉吉方言の「ケー」の文中用法と文末用法の接続関係の考察を行い、第6節で結論と課題を述べる。

2. 先行研究

2.1 首都圏方言の「から」の文末用法と終助詞の接続

首都圏方言の「から」は、許（2002）が「今川焼、ここ置いとくからね」という例を挙げて指摘しているように、文末用法において「ね」が付き得る。また、白川（2009: 167）は「から」の言いつくし文に対人的モダリティ形式を伴う独立文と平行性があるとして、「煙草買ってくるか

ら」が「煙草買ってくるよ」とも言えるように終助詞との言い換えも可能とする。しかし、こういった終助詞との接続関係の詳しい説明はない²。

2.2 熊本県方言の接続助詞「ケン」および終助詞

続いて、熊本県方言の理由の接続助詞「ケン」と終助詞の先行研究を示す。阪上（2023）では「ケン」の文末用法を首都圏方言の「から」よりも抽象化した、「話し手の確信的な事態の一方的な知らせ」という対人的モダリティの意味で主節に付加するとした。(7)のような構文である。

(7) (雨が降っていることに気づき知らせる時) ア アメガ フットルケン。(阪上 2023)

そして、終助詞との接続形の「ケンネ」「ケンナ」を、阪上（2023）では(8)のように話し手の確信的な認識に言明して聞き手との共有を確認する意味機能を持つものとした。一方(9)のような話し手にとって不確かな情報の確認では「ケンネ」が使えない。

(8) A: 阿蘇山から見える景色は良かったよ。B: アレワ ヨカケンネ。(阪上 2023)

(9) (不確かな情報を確認する際) コトシノ ブンカサイワ チューシ {ヨネー/*ダケンネ}。

多少の制約はあるが、熊本県方言の「ケン」は首都圏方言の「から」より終助詞化が進んでいると思われる。そのために首都圏方言で終助詞が使える例でも「ケン」が使えると言える。

また、熊本県方言の終助詞には(10)(11)のように「バイ」や「タイ」がある(秋山 1983: 226, 神部 1991: 275)。和田（2009）は「タイ」に(12)のような間投助詞的用法もあるとする。

(10) オリヤー モー イヌッ バイ。(おれはもう帰るよ。)(神部 1992: 41)

(11) ショーノ ナカ タイ。(しょうがないさ。)(神部 1992: 41)

(12) あそこの郵便局でタイ、山田さんにあったと。(和田 2009: 1)

また、終助詞の接続形には、藤原(1986: 67–70, 404)、神部(1992: 52)等によると「タイナ」「タイネ」「バイナ」「バイネ」といった形がある。

2.3 鳥取県倉吉方言の接続助詞「ケー」

鳥取県倉吉方言の理由の接続助詞「ケ(一)」の文末用法は、小矢野(2017)が(13)のような例を挙げている。

(13) (今年の梨の出来を聞かれて) 今年か！ それが どだい いけんかったけ。

² 許(2002)や白川(2009)は首都圏方言を地理的基盤とした全国共通語を対象としているが、本論ではこれを「首都圏方言」とみなす。

(今年のですか？それがねえ、まったく駄目でしたね) (小矢野 2017)

こういった例を受けて、小矢野 (2017) は文末形式「ケー」を聞き手に発話内容を強く伝える態度を表すものと結論付ける。また、湯浅 (2003: 130, 2004: 64-70) は「ケナー」「ケーナー」は話し手の最も伝えたい情報に付くとして、(14) のように聞き手の知らない情報を伝えるのみの用法もあるとしている。そして「ケナー」「ケーナー」を話者が際立たせたい情報の指標とする。

- (14) ウチノ子ワ ホンニ ジットシトレンダケナー キノーモ 目離シタ隙ニ
橋ノホーマデ 出トッタダケーナー… (うちの子は本当にじっとしていられなくてね,
昨日も目を話した隙に橋の方まで出ていたんだよ) (湯浅 2004: 70-71)

訳から分かる通り、これらの例も (7) (8) と同様に首都圏方言では終助詞が自然となる。こういったことから、鳥取県倉吉方言の「ケ」「ケー」も首都圏方言より終助詞化が進んでいると思われるが、どういう場合に使えるとどういう場合に使えないのか、はっきり分かっていない。

2.4 述部のモダリティ表現の階層と接続関係

先に触れた終助詞の接続にはモダリティ階層が関わる。渡辺 (1953, 1968), 林 (1960), 南 (1993) によると述部の構造はいくつかの階層に分かれる。前の方ほど事態の論理的関係に関わり、末尾ほど話し手の態度や情意に関わるとされる。この話し手の判断や態度の表現は仁田 (1991), 益岡 (1991, 2000) 等でモダリティとされ、聞き手への働きかけを表す終助詞はモダリティ形式に含まれる。陳 (1987) も終助詞を話し手と聞き手の認識のギャップを埋めるものとする。加えて、渡辺 (1968) や南 (1993) は終助詞に「か」「さ」「わ」→「よ」→「な」「ね」といったモダリティの階層構造があるとしている。本論ではこういった階層構造を踏まえて文末における接続助詞と終助詞の接続関係を明らかにし、文中における間投助詞との接続関係と比較する³。これによって理由の接続助詞の終助詞化を、他の助詞との接続・範列関係から示すことができる。

3. 調査方法

面接質問調査を 2022～2024 年に首都圏方言話者 5 名と熊本方言話者 8 名と倉吉方言話者 3 名を対象に実施した。まず、首都圏方言話者に「から」や終助詞・間投助詞の容認度を尋ねた。首都圏方言話者・熊本方言話者⁴・倉吉方言話者の情報を (15) に記す。

- | | | |
|----------------|--------|----|
| (15) 言語形成期の居住地 | 生年 | 性別 |
| 首都圏 A: 東京都江戸川区 | 1995 年 | 男性 |

³ 終助詞同士の接続もモダリティ階層に関わるが、これは意味・用法に関わる問題なので今後の課題とする。

⁴ 同じ熊本県内でも異なる地域出身の話者を含むが、接続助詞「ケン」に関する現象は熊本県内で広く見られるので、一括して「熊本方言」とする。また、熊本方言話者は年齢の幅が広いが、世代差は見られなかった。

首都圏 B：神奈川県厚木市	1998 年	男性
首都圏 C：神奈川県相模原市	1998 年	男性
首都圏 D：東京都新宿区	1999 年	女性
首都圏 E：神奈川県厚木市	1999 年	男性
熊本 A：熊本県熊本市（調査時に県内在住）	1938 年	男性
熊本 B：熊本県熊本市	1955 年	男性
熊本 C：熊本県天草郡（調査時に県内在住）	1957 年	女性
熊本 D：熊本県熊本市	1986 年	女性
熊本 E：熊本県八代市	1992 年	男性
熊本 F：熊本県熊本市	2001 年	女性
熊本 G：熊本県阿蘇市	2002 年	女性
熊本 H：熊本県菊池郡	2002 年	女性
倉吉 A：鳥取県倉吉市（調査時に市内在住）	1967 年	男性
倉吉 B：鳥取県倉吉市（調査時に市内在住）	1968 年	男性
倉吉 C：鳥取県倉吉市	1970 年	男性

熊本方言・倉吉方言話者を対象とした調査では首都圏方言の例文を方言に訳してもらい、「ケン」「ケー」が使われなかった場合は「ケン」「ケー」を用いた例文を提示して可否を尋ねた。調査項目は大きくⅠ～Ⅲに分かれる。例文は阪上（2023）で熊本方言の理由の接続助詞の用法を明らかにするために用いたものと同一である。本論ではそれに加えて間投助詞の後接も確認した。まずはⅠで文中での本来的な用法を確認し、「さ」「ね」といった間投助詞の使用も調査した。

Ⅰ. 文中での本来的な用法

- 〔1〕今日は日曜日だから、車通りが多いよ。
- 〔2〕地面が濡れているから、雨が降ったのだろう。
- 〔3〕今お茶でも入れるから、上がって。
- 〔4〕もうすぐおでんができるから、待っていて。
- 〔5〕私がスイカを切るから、君は盛り付けてくれ。

次にⅡでは首都圏方言の「から」に見られる文末用法を確認する。〔1〕～〔4〕は具体的な行為要求にとりやすい例で、〔2〕は「上がって」、〔3〕は「少し待っていて」のような含意が解釈できる。一方、〔5〕～〔8〕は具体的な行為要求にとりにくく、聞き手に発話内容を知らせる意味機能を持つ。〔6〕～〔8〕にあるような「ね」との接続形も尋ねる⁵。

⁵ それ以外のⅡの項目では接続助詞と終助詞の接続を逐一確認していないが、「ネ」「ナー」等の終助詞が積極的に回答されることがあった。

II. 首都圏方言の「から」に見られる文末用法

- 〔1〕（家族に留守番を頼む意味で）ちょっと買い物に行ってくるから。
- 〔2〕（自宅にきた客に席を勧める時に）今お茶でも入れるから。
- 〔3〕（人と外出する際、先に外に出ている人に）今すぐ靴を履くから。
- 〔4〕（依頼をした後、別れ際に）それでは、頼んだから。
- 〔5〕（会合等で退出する際に）では、僕／私はこの辺で帰るから。
- 〔6〕（家に来た友人に）帰りは車で送ってあげるからね。
- 〔7〕（部屋を散らかしている家族に）今日中に片付けておかないと全部捨てるからね。
- 〔8〕遅くに出かけてお化けに会っても知らないからね。

そしてⅢは首都圏方言では「から」が使いにくく、終助詞が自然となる例である。Ⅲでは下線部を空欄にして自由に助詞を補足してもらった。これによって首都圏方言の終助詞ではなく文脈で意味を統制し、「ケン」「ケー」が使える意味用法を検証できる。Ⅲの〔1〕は話し手の知識を知らせるもの、〔2〕〔3〕は単にその場で気付いた事態を知らせる例で、これらでは首都圏方言の「よ」が使える。〔4〕は話し手が経験した事態を表し、〔5〕は質問に対する応答表現で、ここでも首都圏方言で「よ」が自然となる。また、〔6〕はその場で生じた評価を独話的に述べる例で、「わ」や「な」が使える。〔7〕は聞き手と共有する情報の確認で、首都圏方言の「ね」が使える。そして、Ⅲの〔8〕～〔14〕では首都圏方言で終助詞の接続形「よね」が使える用例を尋ねる。蓮沼（1992）、野田（1993:10）、日本語記述文法研究会（2003:266）等で「よね」には聞き手との一致を想定して話し手の認識を示し、聞き手に確認する機能があるとされる。また、「よね」の用法は話し手の認識を表すものと聞き手の方が詳しい情報の確認を求めるものに分けられる。〔8〕～〔13〕が前者、〔14〕が後者に当たる。話し手の認識を表す用法の項目では〔10〕のように意見を述べて同意・確認を求める例や、〔12〕のように聞き手に同意する例を設定した。

Ⅲ. 首都圏方言の「から」に置き換えにくい文末用法

- 〔1〕A：熊本のからし蓮根が食べたいな。B：名産品のからし蓮根は高い__。
- 〔2〕（雨が降っていることに気付き知らせる時）あ、雨が降っている__。
- 〔3〕（聞き手の襟が立っているのを見て知らせる意味で）襟が立っている__。
- 〔4〕A：あの歌手は紅白歌合戦に出たね。B：新聞に載っていた。生まれは九州と書いてあった__。
- 〔5〕（いつ頃ここに来たかと聞かれて）僕／私は生まれてからずっとここに住んでいる__。
- 〔6〕（一人でスポーツ番組を見て）やっぱりプロの選手はアマチュアと雰囲気が違う__。
- 〔7〕（聞き手を自然公園で見た次の日）昨日自然公園にいた__。
- 〔8〕A：今は耳にピアスをしている人が多いね。
B：でも、びっくりする__。この頃は鼻にも穴を開けているんだから。
- 〔9〕（昔一緒に花火大会に行った人と話す際、同意を求める意味で）
A：それから夏には花火を見に行った。B：そうだったね。A：あの花火は綺麗だった__。

〔10〕（自身の意見を述べて同意・確認を求める意味で）

A：今度沖縄に旅行しようよ。B：沖縄に旅行するなら，問題はお金だ__。

〔11〕（旅行に行ってきた A と旅行の話になり，同意する意味で）

A：阿蘇山から見える景色は良かったよ。B：あれは良い__。

〔12〕（高校同期の A と修学旅行の時の話になり，同意する意味で）

A：あの時は他校の修学旅行生が 200 人くらい来ていた。B：あー，多かった__。

〔13〕（高校同期の A と修学旅行の時の話になり，同意する意味で）

A：あの時は生徒が夜に外出すると先生が怒った。B：あー，夜間の外出を怒っていた__。

〔14〕（不確かな情報を確認する意味で）今年の文化祭は中止だ__？

4. 調査結果

調査結果を【表 1～3】にまとめる。例文中の下線部に理由の接続助詞が使えると回答されたものに「○」，使えないと回答されたものに×を付ける。接続助詞単独ではなく「ネ」「ナー」が義務的と回答されたものに「ネ」「ナー」を付け，任意に「サ」「ネ」「タイ」「ナー」が後接できると回答された場合に「○（サ）」「○（ネ）」「○（タイ）」「○（ナー）」とする。

4.1 文中用法における間投助詞との接続関係

まず I で確認した文中での本来的な用法について見る。首都圏方言の調査結果を【表 1-1】に示す。「カラヨ」には話者から古風，位相が限られる，乱暴・粗雑な印象があるといった意見があり，首都圏 C 以外は不自然ではないが自分では言わないとする⁶。

表 1-1 首都圏方言：I．文中での本来的な用法

	A	B	C	D	E
〔1〕 日曜日	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）	○（ネ）	○（ネ）○（サ）
〔2〕 地面	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）
〔3〕 上がって	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）
〔4〕 待って	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）
〔5〕 スイカ	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）	○（ネ）○（サ）

結果を見ると，「カラ」は自然に使える，基本的に間投助詞の「サ」や「ネ」を付けても言える。

次に，熊本方言における I の調査結果を【表 1-2】に示す。熊本方言の調査結果は阪上（2023）のものとは重なる部分がある。熊本 A と熊本 D には間投助詞の接続について網羅的に確認していないが，それ以外の話者には全て確認済みで，間投助詞が不適格とされる項目があった。基本的に「ケン」は I で使える，後に間投助詞の「ネ」や「タイ」が付加できる場合もある。I 〔2〕では

⁶ 「サ」「ネ」とは使用状況が異なるため，「ヨ」の結果は表に記していない。

「ミチ ヌレトルケンネー アメン フッタッダロー。」【A】，〔4〕では「モースグ オデン デキルケンタイ マットッテ。」【H】のように言えるという回答があった。

表 1-2 熊本方言：I. 文中での本来的な用法

	A	B	C	D	E	F	G	H
〔1〕 日曜日	○	○ (ネ)	○	○ (タイ)	○ (ネ) ○ (タイ)	○	○ (ネ) ○ (タイ)	○ (ネ) ○ (タイ)
〔2〕 地面	○ (ネ)	○	○	○ (タイ)	○ (ネ) ○ (タイ)	○	○ (ネ)	×
〔3〕 上がって	○ (ネ)	○ (ネ)	○ (タイ)	○ (タイ)	○ (タイ)	○	○ (ネ)	○ (ネ) ○ (タイ)
〔4〕 待って	○	○ (ネ)	○ (タイ)	○ (タイ)	○ (タイ)	○ (ネ)	○ (ネ)	○ (ネ) ○ (タイ)
〔5〕 スイカ	○	○ (ネ)	○ (タイ)	○ (タイ)	○ (タイ)	○	○ (ネ)	×

そして、倉吉方言の調査結果は【表 1-3】のようになった。〔1〕であれば「キョーワ ニチヨービダケー クルマドーリガ オーイデ。」【B】のように、理由の接続助詞として「ケー」が使える⁷。また、任意に間投助詞「ナー」を後接させることが可能で、〔3〕では「イマ オチャデモイレルケーナー アガットイテ。」【B】のように言える。

表 1-3 倉吉方言：I. 文中での本来的な用法

	A	B	C
〔1〕 日曜日	○ (ナー)	○ (ナー)	○ (ナー)
〔2〕 地面	○ (ナー)	○ (ナー)	○ (ナー)
〔3〕 上がって	○ (ナー)	○ (ナー)	○ (ナー)
〔4〕 待って	○ (ナー)	○ (ナー)	○ (ナー)
〔5〕 スイカ	○ (ナー)	○ (ナー)	○ (ナー)

4.2 文末用法における終助詞との接続関係

続いて文末用法における終助詞との接続関係について、Ⅱの首都圏方言の「から」に見られる文末用法の調査結果を示す。首都圏方言の結果は【表 2-1】のようになった。Ⅱの一部では「含意が伝わりにくい」という理由で「から」が許容されないが、基本的に「から」が使える。

⁷ 国立国語研究所（1989）による『方言文法全国地図』第33図では、中国地方で「ケー」の他に「ケン」も散見される。そのため倉吉方言話者に「ケン」も使うか尋ねたが、言わないという回答があった。

表 2-1 首都圏方言：Ⅱ. 首都圏方言の「から」に見られる文末用法

	A	B	C	D	E
〔1〕 買い物	○	○	○	×	○
〔2〕 お茶	○	×	○	○	○
〔3〕 靴	○	○	○	○	○
〔4〕 頼んだ	○	○ネ	×	○ネ	○ネ
〔5〕 帰る	○	○	○	○	○
〔6〕 車	○ (ネ) ○ (サ)	○ (ネ)	○ (ネ)	○ (ネ)	○ (ネ)
〔7〕 捨てる	○ (ネ)	○ (ネ)	○ (ネ) ○ (サ)	○ (ネ)	○ (ネ)
〔8〕 お化け	○ (ネ)	○ (ネ)	○ (ネ)	○ (ネ)	○ (ネ)

〔6〕～〔8〕では「カラ」の後に「ネ」が接続できる。「カラサ」は〔6〕の「帰りは車で送ってあげるからさ。」であれば「ゆっくりしなよ」といった内容が後にないと不自然といった意見があり、全体的に容認度は低い。「カラヨ」はⅡでも乱暴・粗雑な印象があると回答され、首都圏 C 以外は不自然ではないが自分では言わないと回答している。加えて、首都圏 C は「カラヨ」も〔6〕であれば「お酒を飲んでいきなよ」のように後に続く内容がないと不自然としている。

続いて、熊本方言におけるⅡの「から」に見られる文末用法の調査結果を【表 2-2】に示す。

表 2-2 熊本方言：Ⅱ. 首都圏方言の「から」に見られる文末用法

	A	B	C	D	E	F	G	H
〔1〕 買い物	○	○	○	○	○	○	○	○
〔2〕 お茶	×	○	○ネ	○	○	○	○	○
〔3〕 靴	○	○	○	○	○	○	○	○
〔4〕 頼んだ	×	○	○ (ネ)	○	○	×	○	○ (ネ)
〔5〕 帰る	×	○ (ネ)	○	○ (ネ)	○	○ (ネ)	○	○
〔6〕 車	○	○ (ネ)	○ネ	○ (ネ)	○ネ	○ (ネ)	○ (ネ)	○
〔7〕 捨てる	○ (ネ)	○ (ネ)	○	○ (ネ)	○ネ	○ネ	○ネ	○ネ
〔8〕 お化け	○ (ネ)	○ (ネ)	○ネ	○ (ネ)	○ネ	○ (ネ)	○	○ネ

一部で「ケン」が許容されず〔5〕「オラー コノヘンデ タイサンスルバイ。」【A】のように終助詞「バイ」が回答されたが、「ケン」は基本的に使える。また、「ケン」は「ネ」との連接形も可能である。ただ、「ネ」はⅠと異なり文末では必須の場合もあった。一方、「ケンヨ」「ケンバイ」「ケンタイ」はⅡの文末用法では全ての話者に許容されない。

加えて、倉吉方言におけるⅡの調査結果を【表 2-3】に示す。

表 2-3 倉吉方言：Ⅱ. 首都圏方言の「から」に見られる文末用法

	A	B	C
〔1〕 買い物	○	○	○ナー
〔2〕 お茶	○	○	○ナー
〔3〕 靴	○	○	○ナー
〔4〕 頼んだ	○ (ナー)	○ナー	○ナー
〔5〕 帰る	○ナー	○	○ (ナー)
〔6〕 車	○ナー	○ (ナー)	○ナー
〔7〕 捨てる	○ナー	○ (ナー)	○ナー
〔8〕 お化け	○ (ナー)	○ナー	○ナー

文末でも「ケー」は使えるが、基本的に終助詞「ナー」が必要という意見があった。Ⅱ〔1〕であれば「チョット カイモノニ イッテクルケーナー。」【C】といった回答がされている。

次に、ここからはⅢの首都圏方言の「から」に置き換えにくい文末用法の調査結果をまとめる。首都圏方言の結果は【表 3-1】のようになった。

表 3-1 首都圏方言：Ⅲ. 首都圏方言の「から」に置き換えにくい文末用法

		A	B	C	D	E
話し手の知識	〔1〕 名産品	×	×	×	×	○
その場の知覚	〔2〕 雨	×	×	×	×	×
	〔3〕 襟	×	×	×	×	×
話し手の経験	〔4〕 新聞	×	×	×	×	×
質問への応答	〔5〕 ずっと	×	×	×	×	×
独話的な言明	〔6〕 雰囲気	×	×	×	×	×
聞き手に確認	〔7〕 公園	×	×	×	×	×
話し手の認識	〔8〕 ピアス	×	○ネ	×	×	×
	〔9〕 花火	○ネ	×	×	×	×
	〔10〕 沖縄	×	×	×	×	×
	〔11〕 景色	○ネ	○ネ	×	×	×
	〔12〕 他校	×	×	×	×	×
	〔13〕 外出	×	×	×	×	×
不確かな情報の確認	〔14〕 文化祭	×	×	×	×	×

〔2〕の単にその場で知覚した事態を知らせる項目では「から」が許容されない。ここでは「あ、雨が降っているよ。」【B】のように終助詞「よ」が使えると回答された。〔3〕～〔5〕でも「よ」が自然と回答されており、「から」は許容されない。独話的な言明の〔6〕では「やっぱりプロの選手はアマチュアと雰囲気が違うな。」【D】のように「な」や「わ」が回答されている。聞き手と共有する情報の確認の〔7〕では「昨日自然公園にいたね。」【E】のように「ね」が回答され、これらでも「から」は許容されない。

そして話し手の認識を述べて聞き手に確認する項目である〔8〕～〔14〕では、「からね」の容認度が低くなっている。〔13〕の「あの時は生徒が夜に外出すると先生が怒った。」に対して「あー、夜間の外出を怒っていたよね。」【C】のように「よね」が使えるという回答が多かった。

続いて、熊本方言におけるⅢの文末用法の調査結果は【表 3-2】のようになった。

表 3-2 熊本方言：Ⅲ. 首都圏方言の「から」に置き換えにくい文末用法

		A	B	C	D	E	F	G	H
話し手の知識	〔1〕 名産品	×	×	○(ネ)	×	×	○	○ネ	○
その場の知覚	〔2〕 雨	×	×	○	×	○	○	×	○
	〔3〕 襟	×	×	×	○	×	○	×	×
話し手の経験	〔4〕 新聞	○ネ	×	○ネ	×	○ネ	○	×	○
質問への応答	〔5〕 ずっと	×	×	×	×	×	○	×	×
独話的な言明	〔6〕 雰囲気	×	×	○ネ	×	×	×	×	×
聞き手に確認	〔7〕 公園	×	×	×	×	×	×	×	×
話し手の認識	〔8〕 ピアス	×	○(ネ)	○	○	○(ネ)	×	○(ネ)	×
	〔9〕 花火	×	○ネ	○(ネ)	○ネ	○ネ	×	×	○ネ
	〔10〕 沖縄	×	○(ネ)	○(ネ)	○ネ	×	○(ネ)	○ネ	×
	〔11〕 景色	○ネ	○ネ	×	×	○ネ	○ネ	○ネ	○ネ
	〔12〕 他校	×	○ネ	○ネ	×	×	×	○ネ	○ネ
	〔13〕 外出	×	○ネ	○ネ	○ネ	×	×	×	○ネ
不確かな情報の確認	〔14〕 文化祭	×	×	×	×	×	×	×	×

聞き手に話し手の知識や経験・その場で知覚した事態を知らせる〔1〕～〔4〕で首都圏方言の「から」よりは比較的「ケン」を使いやすく、話し手の認識を述べて聞き手に確認する〔8〕～〔13〕で「ケン」と「ネ」の接続形が使える点は第2節で述べた通りである。一方、〔6〕の独話的な言明や〔7〕の聞き手への確認といった意味で「ケン」は使いにくい。〔14〕の不確かな情報の確認で「ケンネ」が使えない点も第2節で述べたことと一致する。阪上（2023）でも示したように、「ケン」は話し手の確信的な事態の知らせの意味で文末に用いやすい。そして、ⅢでもⅡの首都圏方言の「から」に見られる文末用法と同様に「ケンタイ」は使えない。Ⅲの〔13〕の「アー ヤ

カンノ ガイシュツバ オコットッタケンネ。」【B】のように「ケンネ」が使える項目で「ケンヨ」「ケンバイ」「ケンタイ」は言わない話者が多い⁸。

一方、倉吉方言では【表3-3】のようになった。

表 3-3 倉吉方言：Ⅲ．首都圏方言の「から」に置き換えにくい文末用法

		A	B	C
話し手の知識	1：名産品	○ナー	○	○ナー
その場の知覚	2：雨	○	×	○
	3：襟	○	×	○ナー
話し手の経験	4：新聞	○ネー	×	○ナー
質問への応答	5：ずっと	○	○	○ナー
独話的な言明	6：雰囲気	○ナー	○ナー	○ナー
聞き手に確認	7：公園	×	×	×
話し手の認識	8：ピアス	○	×	○ナー
	9：花火	○ナー	○ナー	○ナー
	10：沖縄	○	×	○ナー
	11：景色	○ナー	○ナー	○ナー
	12：他校	○ナー	○ナー	○ナー
	13：外出	○ナー	○ナー	○ナー
不確かな情報の確認	14：文化祭	×	×	×

聞き手に発話内容を知らせる〔1〕～〔4〕のみならず、質問への応答を表す〔5〕や独話的な言明を表す〔6〕のような、熊本方言で「ケン」が使いにくい項目でも「ケー」が使える。〔6〕であれば「ヤッパリ プロノ センシュワ アマチュアト フンイキガ チガウケーナー。」【C】のように言う。「ケー」が使えないとする話者からは、〔3〕であれば「エリガ タットルデ。」

【B】のように終助詞「デ」が回答されている。加えて、ここでもⅡと同様に終助詞「ナー」が必須という回答が多かった。〔1〕では「鳥取のお饅頭が食べたいな。」に対して「メーサンヒンノ オマンジューワ タカイケーナー。」【A】といったものである。

そして〔8〕～〔13〕でも基本的に「ケーナー」が使えると回答された。〔9〕の「アノ ハナ ビワ キレーダッタケーナー。」【B】，〔12〕の「アー オーカッタケーナー。」【C】のように、

⁸ ただ、これらの接続形は首都圏方言の「からだ」に当たる用法で使える。以下のような例ではこれらを使えるという回答がある。特に「ケンタイ」は話者全員が許容した。

・（「今日は車通りが多いなあ。」と言われて）

ニチヨービダ {ケンタイ／ケンバイ／ケンヨ}。（日曜日だからだよ。）【A】

これは理由節が焦点で分裂文の述語になっている構文である。つまり文脈中に主節に相当する内容があり、関係付けに近い用法と見なせる。これは本論で対象とする文末用法とは異なる。

⁹ 倉吉方言の時のみ鳥取県に因んだものに例文の内容を変更している。

話し手の認識を述べて聞き手に確認する意味で使える点は熊本方言の「ケンネ」と同様である。加えて、〔14〕の聞き手の方が詳しい不確かな情報の確認に使えない点も熊本方言と共通している。「ケナー」だと聞き手に知らせる意味になるという回答がされた。〔14〕では「コトシノ ブンカサイワ チューシカイナー。」【B】、「コトシノ ブンカサイワ チューシダナー。」【C】といった回答があった。これは「中止かな?」「中止だね?」という意味だと考えられる。Ⅲで倉吉Cは「デナー」という形式は言わないと回答しており、「ヨナー」という形式は倉吉方言話者から回答されていない。

5. 「カラ」「ケン」「ケー」の文中用法と文末用法の助詞との接続関係の異同

この結果をもとに、首都圏方言の「カラ」・熊本方言の「ケン」・倉吉方言の「ケー」の文中用法と文末用法における助詞との接続関係の異同を考察する。第4節で示した結果をまとめると(16)のようになる。これは、2.4で触れた渡辺(1968)や南(1993:54)の「か」「さ」「わ」→「よ」→「な」「ね」という終助詞の階層構造に基づく接続関係を参考にした。接続可能な形式の境界に+を記す。

(16) a. 首都圏方言の「カラ」

文中：カラ + {ヨ（位相制限有）・サ・ネ}

文末：サ¹⁰

ワ・カ + ヨ + {ネ・ナ}

カラ + {ネ・ナ}

b. 熊本方言の「ケン」

文中：ケン + {タイ・ネ}

文末：ヨ・バイ・タイ + {ネ・ナ}

ケン + {ネ・ナ}

c. 倉吉方言の「ケー」

文中：ケー + ナー

文末：ヨ・デ

ケー + ナー（必須性高）

まず首都圏方言では文中の「カラ」に「サ」「ネ」が接続でき、位相は限られるが「ヨ」も接続できる。一方で文末用法では専ら「ネ」の類が接続する。「帰りは車で送ってあげるからね。」といったものである。ここで「カラ」に「ヨ」や「サ」が接続すると間投助詞と捉えられる。これは調査結果で「カラサ」「カラヨ」は後に続く内容がないと不自然とされたことから分かる。

¹⁰ 方言によっては「サ」に「ヨ」「ネ」「ナ」が接続することがあるが、首都圏方言では接続しないのでこのように記す。

次に、熊本方言の「ケン」は文中の場合間投助詞として「タイ」と「ネ」が接続するが、文末用法では専ら「ネ」の類が接続する。これには、Ⅲ〔11〕の「阿蘇山から見える景色は良かったよ。」に対して「アレワ ヨカケンネ。」ように話し手の認識に言明して聞き手との共有を確認する意味用法がある。このような文末用法で「ヨ」「バイ」「タイ」は「ケン」と接続しない。

そして倉吉方言の「ケー」はどちらにおいても「ナー」が接続できるが、文末用法の方が「ナー」の必須性が高く、文中では任意となる。また、倉吉方言の「ケー」も熊本方言の「ケン」と同様に、話し手の確信的な事態の一方的な知らせの意味で文末に使える。Ⅲの回答にあるように、「デ」が使える例で「ケー」も使えると回答されている。加えて、倉吉方言で「ヨ」「デ」と「ナー」は接続しない可能性がある¹¹。このため上のような階層構造に位置付けた。

以上のことから、これらの接続助詞は首都圏方言の「ヨ」・熊本方言の「ヨ」「バイ」「タイ」・倉吉方言の「ヨ」「デ」が使われる形態統語環境で使われ得る。つまり、これらの終助詞と同じモダリティ階層に位置し、これらと範列的な対立関係にあると考えられる。

6. 結論と課題

本調査の結果、首都圏方言・熊本方言・倉吉方言の理由の接続助詞の文中用法における間投助詞との接続関係と文末用法における終助詞との接続関係には共通点もあるが、差異もあることが分かった。これらの接続助詞の文末用法は、首都圏方言の「ヨ」・熊本方言の「ヨ」「バイ」「タイ」・倉吉方言の「ヨ」「デ」が使われる形態統語環境で使われ得ることが明らかになった。ここから、文末で使われるこれらの接続助詞は上の終助詞と範列的な対立関係にあると考えられる。第1節で触れた接続助詞の終助詞化の意味・用法面の記述は今後の課題である。また、倉吉方言の終助詞間の接続関係は、今後さらなる調査が必要となる。

参考文献

- 秋山正次（1983）「熊本県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 9—九州地方の方言—』東京：国書刊行会。
- 神部宏泰（1991）「九州方言の総括的解説：文法」九州方言学会編『九州方言の基礎的研究 改訂版』東京：風間書房。
- 神部宏泰（1992）『九州方言の表現論的研究 研究叢書 108』大阪：和泉書院。
- 許夏玲（2002）「話し言葉における文末表現と終助詞「ネ」「ヨ」の共起関係—「ネ」「ヨ」が付かない文末表現を中心に—」『言葉と文化』3: 111–126。
- 小矢野哲夫（2017）「倉吉方言の言いさし文—行くけえ。知らんに。—」倉吉ことばの会 第3回講演会。
- 国立国語研究所編（1989）『方言文法全国地図』第1集 助詞編 財務省印刷局。
- 阪上健夫（2023）「熊本方言における順接確定条件節の主節化」『日本方言研究会研究発表会発表

¹¹ この点は詳細に調査していないため、今後の課題となる。

- 原稿集』第116回: 17-24.
- 白川博之 (1991) 「カラ」で言いさす文『広島大学教育学部紀要』2 (39) : 249-255.
- 白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』東京: くろしお出版.
- 陳常好 (1987) 「終助詞—話し手と聞き手の認識のギャップをうめるための文接辞—」『日本語学』6 (10) : 93-109.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』東京: ひつじ書房.
- 日本語記述文法研究会 (2003) 『現代日本語文法 4 第8部 モダリティ』東京: くろしお出版.
- 野田恵子 (1993) 「終助詞「ね」と「よ」の機能: 「よね」と重なる場合」『言語文化と日本語教育』6: 10-21.
- 蓮沼昭子 (1992) 「終助詞の複合形「よね」の用法と機能」『対照研究—発話マーカ—について』筑波大学つくば言語文化フォーラム 63-77.
- 林四郎 (1960) 『基本文型の研究』東京: 明治図書.
- 藤原与一 (1986) 「方言文末詞〈文末助詞〉の研究 (下)」『昭和日本語方言の総合的研究』3 東京: 春陽堂書店.
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』東京: くろしお出版.
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』東京: 大修館書店.
- 湯浅千映子 (2003) 「鳥取方言の談話展開の方法: 情報単位という観点から見た情報の内容・機能とその配列について」『学習院大学人文科学論集』12: 103-132.
- 湯浅千映子 (2004) 「鳥取方言の談話展開の方法-情報の配列と文末形式「ケー」の関連について」『学習院大学国語国文学會誌』47: 74-61.
- 和田礼子 (2009) 「方言教材開発のための熊本方言分析の試み—文末詞タイと、接続助詞ケンについて—」科研報告書『地方中核都市在住外国人のための方言教材の開発—その理念の構築と実際—』1-18.
- 渡辺実 (1953) 「叙述と陳述—述語文節の構造」『国語学』13・14: 20-34.
- 渡辺実 (1968) 「終助詞の文法論的位置—叙述と陳述再説」『国語学』72: 127-135.

白山麓方言の授与動詞体系

松倉 昂平

金沢大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

本稿では福井県大野市上打波方言の授与動詞体系の予備的な記述・報告を行う。本方言ではヤル、クレル、イクス（「寄越す」に対応）の3種の授与動詞が使い分けられる。これらの動詞は授与の方向性（遠心的か求心的か）のほか授与の動機や受け手に求められる恩恵意識の大きさにおいて対立する。ヤルは最も広い環境で用いられる一般的・中立的な遠心的授与動詞である。一方、クレルとイクスは遠心的授与も求心的授与も表すが、遠心的用法においては、目上の相手に使えない、意志文と比べて叙述文では使いにくい、補助動詞用法を欠くなどの語用論的・構文的制限を有する。これらの制限は、クレルの遠心的用法に関して日高（1997）が提唱した通方言的傾向に一致するものである。*

キーワード：北陸方言，奥越方言，上打波方言，授受表現

1. はじめに

1.1 目的

本稿では福井県大野市上打波（かみうちなみ）方言の授与動詞体系の記述を行う。具体的には、ヤル、クレル、イクス、の3種の授与動詞の使い分けが主な論点となる。北陸地方においては特に富山県五箇山方言の授与動詞に関する記述が詳細に残されており（日高 1994, 2007 など）、これらの先行研究と対照する形で上打波方言の記述を行っていく。また、上記の3語に加えてクレルの待遇語（尊敬語オグレル、タモル、軽卑語カス）の用法にも触れる。

授与動詞とは、授受行為を表す基本的な動詞のうち与え手が主格に立つものであり（日高 2007: 3）、かつ (1) のような意味的・構文的特徴を有し得ることが指摘されている（同上: 17–18）。同書によれば (1ac) は全ての授与動詞に共有される特徴である一方 (1bde) は必ずしも全ての語にあてはまるとは限らない特徴である。

- (1) a. 単なる物の受け渡しにとどまらず、所有権の移行が無償で行われる
- b. 潜在的な待遇的意味（与え手は受け手よりも上位に立つという立場関係）を含意する
- c. 与え手がガ格やカラ格、対象物がヲ格、受け手がニ格を取る

* 本稿の内容は2024年3月17日に国立国語研究所で開催された令和5年度第2回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会における同題の発表に基づく。

本稿は国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」（プロジェクトリーダー：山田真寛）、JSPS 科研費特別研究員奨励費「北陸諸方言の音韻・文法体系の記述的研究」（19J00755）およびJSPS 科研費基盤研究A「消滅危機方言のプロソディーに関する実証的・理論的研究と音声データベースの構築」（19H00530）の研究成果である。

- d. 授与の方向性（人称・視点）に制限がある
- e. 行為の恩恵的方向性を付与する補助動詞用法がある

1.2 調査地点について

上打波地区は大野市街から東へ約 20km 離れた白山麓の山村である。打波川の上流域に小池、中洞、中村、桜久保、木野、嵐の 6 つの集落が散在しており、明治期には合わせて 1000 人を超える人口を擁していたが¹、主な生業であった焼畑農業の衰退や昭和 40 年前後に相次いだ自然災害の影響により昭和 40 年代に全住民が大野市街などへ移住して以降、（夏季の一時滞在者を除き）無住地域となっている。

打波川流域の方言は、大野市内の他地域の方言とは特に語彙・文法面において大きく異なる。その主な要因は、県境を挟んで隣接する石川県白山市白峰地区との人的交流が盛んであったため、白峰方言と多くの特徴を共有していることにある。特に目につく共通点としては、ノダ文の形式がまず挙げられる。両方言で準体助詞を介さず（例：イクヤ「行くのだ」）、ルに終わる動詞はツチャに終わる語形を取る（例：クツチャ「来るのだ」）。あまり目立つ特徴ではないが本稿で取り上げる通りクレルに視点制約がない（求心的授与にも遠心的授与にも使われる）点も共通点の一つである。その他、場所連体格助詞ナ（例：ヤマ^上 ウチ〈山にある家＝出作り小屋〉）、所有格助詞ガ（例：ウラ^下 モン〈私の物〉）、疑問詞疑問文専用の文末詞ナラ（例：ドコ イク^上 ラ 〈どこへ行くの〉）など多くの共有特徴を見いだせる²（松倉 2023: 131）。本稿ではこれらの白山麓の山村地域に見られる語彙・文法面での共通点を捉えて「白山麓方言」という区分・呼称を用いている。

白峰方言との共通点が接触の影響によりいくらか認められる一方で、相違点も多く、方言区画・系統的にはやはり大野市街方言と近い位置にある。例えば白峰方言が 2 つの式音調（下降式と非下降式）を区別する白峰固有のアクセント体系を有する一方で（新田 1985, 2005 など）、上打波方言のアクセント体系は大野市街方言と同じいわゆる垂井式アクセントである（平山 1953, 1954, 松倉 2023）。

2. 先行研究

授与動詞の全国的な分布は『日本言語地図』第 73, 74 図によって概略明らかになっており、これを見ると、遠心的授与と求心的授与³を異なる動詞で言い分けられない地域も広いことがわかる。大まかな分布傾向としては、東日本（東北）と九州南部（鹿児島）では遠心／求心の区別なくクレルを用い、西日本（近畿以西～九州北部）では遠心的授与にヤル（あるいはアゲル）、求心的授

¹ 大野郡教育会編『福井県大野郡誌』によれば明治 45 年の人口は 1260 人。

² ここに挙げた特徴は、いずれも全国的に見れば様々な地域に広く分布する形式・表現ではあるが、北陸地方に限って見れば白峰、上打波など白山麓地域にしか分布しないあるいは少なくとも周辺方言には存在しない特徴である。

³ 遠心的授与とは「話し手から他者への授与」、求心的授与とは「他者から話し手への授与」を指す（日高 2007: 5）。

与にクレルを用いるという、近畿を中心とした周囲論的分布を描く。中部・関東地方はクレル一本の東日本方言とヤル／クレルの対立がある西日本方言の接触地帯にあたり、両タイプの方が混在するとともに、ヤルとクレルどちらでも遠心的授与を表せるという中間的な方言も分布する。

北陸地方においては西日本型の授与動詞体系（遠心的授与は専らヤルで表す体系）の分布が優勢だが、一部地域には遠心的授与をクレルで表せる東日本型あるいは中間型の体系が残存している。

2.1 富山県五箇山方言

まずは最も詳細に記述されている富山県五箇山方言の授与動詞体系について日高（1994, 1997, 2007）に基づき概説する。

特定の人物に対する授与は基本的にクレルを用いて表し (2)、ヤルは動植物に対する授与か不特定の人（「誰か」）に対する授与を表す (3)。

- (2) オラ マゴニ コノホンオ クレタ

「私が孫にこの本をやった」

（日高 2007: 189）

- (3) イヌニ エサオ {ヤル／*クレル}

「犬に餌をやる」

（日高 2007: 193）

受け手が人間でなければ基本的にクレルは使えないが、可愛がっている動植物であればクレルもあり得るとのことである。ヤルを特定の人物に対して用いると軽蔑的なニュアンスを伴う。つまりクレルは受け手を人格的存在として想定しそこに受け手の恩恵意識が存在・成立する場合に用いられるが、ヤルは受け手を人格的存在として想定せずよって受け手が恩恵意識を抱くという含意もない。クレルとヤルにこのような含意があるために、特定の人物に対する授与であってもクレルの使用が不適切になる文脈がある。受け手の心理的な負担が大きい（受け手に強い恩恵意識を抱かせてしまう）文脈、例えば「家督をクレル」というような文脈では、遠心的なクレルが尊大なニュアンスを帯びて不適切になる (4)。受け手に大きな恩恵意識を抱かせることを避ける、という語用論的な配慮によりヤルが選好されると考えられる。

- (4) ウチオ オジニ {ヤッタ／#クレタ}

「家を次男にやった」

（日高 2007: 196）

またこれと平行して、自分の行為が相手の利益になることを明示する遠心的な補助動詞用法の～テクレル (5) も上述のクレルの含意が前面に出て尊大な表現となることがあり、「かなり目下の相手」にしか使えないという。(2) のような本動詞用法のクレルと比べると使用範囲（使える相手）が限定されているようである。

(5) ワリニ ホンオ ヨンデクリョッカ

「お前に本を読んでやろうか」

(日高 2007: 200)

東京方言の「寄越す」は求心的な授与のみ表すが、五箇山方言のイクスはどちらの方向の授与も表せる (6)。またイクスには本動詞の意味から離れた特殊な補助動詞用法があり、「相手にそれをする能力がないために代わりにやってやる」(日高 2007: 203) という状況を含意する遠心的行為を表す (7)。

(6) オラワ タローニ テガミオ イクイタ

「私は太郎に手紙をよこした」(直訳)

(日高 2007: 190)

(7) ナニ モチャモチャト シトル オラ シテイクスワ

「何, モタモタとしている。私がしてやるよ」

(日高 2007: 203)

2.2 石川県内浦方言

石川県内浦町(現鳳珠郡能登町)方言は、遠心的授与をトラシルまたはターシル(「取らせる」に対応) かクレルで表すが、クレルの使用には文タイプの制限がかかる(日高 1997, 2007)。遠心的用法のクレルは聞き手への授与を表明する文(意志文)でのみ使われ、単なる叙述文では用いられない (8) (9)。

(8) ワレニ コノホン クリョカ

「おまえにこの本をやろうか」

(日高 2007: 238)

(9) *キンニョー マゴノタンジョービヤッタガデ ホン クレタ

「昨日, 孫の誕生日だったので, 本をやった」

(同上)

2.3 石川県白峰方言

石川県白峰方言でも (10) のようにクレルが遠心的授与を表し得ることは指摘されているが(新田 2005: 2), ヤルとの使い分けなど, 詳細は明らかになっていない。

(10) 何モクレル物ワナイ

「何もあげる物はない」

(新田 2005: 2)

2.4 課題

先行研究を踏まえると、北陸方言の授与動詞体系に関する調査・研究課題として次のような点を挙げられる。まずクレルに関して、遠心的用法を有する方言が他にあるかどうか、あった場合にはヤルなど他の授与動詞との使い分けを解明する必要がある。クレルが遠心的用法で用いられる環境・条件には様々な制限がかかるが、そこには二つの通方言的な傾向が見られることが指摘

されている（日高 1997）。一つめは、五箇山方言（2.1）や長野県信州新町方言（同上: 114–113）のように、クレルは補助動詞用法「～テクレル」で遠心的用法を失いやすい（逆に言えば本動詞用法では遠心的用法を保持しやすい）という傾向と、二つめは、内浦方言（2.2）のように、叙述文で遠心的用法を失いやすく意志文で遠心的用法を保持しやすいという傾向である。これらの傾向があてはまるかどうかのも一つの注目点になる。ヤルに関しては、五箇山方言のように受け手が動植物に限られるなど使用条件に制限があるかどうか、西日本方言のように一般的な遠心的授与動詞として定着しているかどうかが調査対象になろう。またイクスについても、そもそもイクスを使うか、授与の方向性に制限があるか、補助動詞用法はあるかなどその意味・用法を記述する必要がある。

3. 調査方法

本稿で使用するデータは話者と直接面談する調査で得られた。授与動詞を含む共通語文を提示し、共通語で文脈を補足した上で、方言訳を求めた。あるいは、調査者が作成した方言文を提示し、文法性・容認度判断を求めた。どちらの方法でも、話者から文脈やニュアンスが補足されることがあった（「こういう文脈では適切だがこういう文脈では不可」など）。2022 年 7 月から 2023 年 9 月まで基礎語彙調査を行うなかで断片的な情報が集まり、2023 年 12 月に授与動詞に特化した面談調査を実施した。調査協力者は上打波中洞（なかばら）集落出身の 1939 年生男性 1 名である。1972 年まで上打波に居住し、1972 年以降現在まで大野市街に居住されている。全住民が集団で離村しある程度まとまって移住したこと、配偶者・親類が上打波出身であること、職業上も同郷出身者との付き合いが続いたことで、離村後も上打波方言の使用が絶えることはなかった。

4. データと考察

4.1 ヤル、クレル、イクスの遠心的用法

ヤルは最も一般的・中立的な遠心的授与動詞である。五箇山方言（2.1）とは異なり、受け手は動植物に限定されず、特定の人物に対して用いても軽蔑的なニュアンスは全く含まない(11)。

- (11) a. オツツァネ ミヤゲオ ヤッタ
「（私は）父親に土産をあげた」
b. オツツァネ ミヤゲオ コーテヤッタ
「（私は）父親に土産を買ってあげた」

ヤルと比較してクレル、イクスはより限定的な条件下で用いられる。動植物に対する授与は基本的にヤルで表す (12a)。五箇山方言（2.1）では「可愛がっている動植物」に対して、つまり恩恵意識を持つ人格を想定し得るような対象に対してはクレルを使い得るということだったが、上打波方言では「動植物がそれを必要としているあるいはあたかも欲しがっている様子である」場

合にクレルやイクスを使うことができる (12b)。クレルやイクスには受け手が人格を有する存在、あるいは恩恵を受け取ることができる存在であるという含意があると言える。

(12) a. ハナネ ミズ {ヤル／#クレル／#イクス}

【庭へ水を撒くついでに】「花に水をやる」

b. ハナネ ミズ {ヤル／クレル／イクス}

【花がしおれているから】「花に水をやる」

クレルやイクスは、受け手が人間であっても、目上の人である場合には使いにくくなる (13)。

(13) オツツァネ ミヤゲオ {ヤッタ／#クレタ／#イクイタ}

「(私は) 父親に土産をあげた」

これはクレルやイクスが実際に受け手に恩恵意識を持つことを要求する含意がある（話者の言葉を借りれば「恩に着せる」ニュアンスがある）ためである。待遇上の配慮から、目上の人には使いにくくなる。(13) のような文でクレルやイクスを選択し得る文脈としては、すでに成人した者が自分の父親と大人同士対等な立場として接する場合が想像されるという。

クレルとイクスは授与行為に至る動機が異なるようである。クレルは「自分の意志により、慈悲の心から」行う授与を表す一方、イクスは「相手に何らかの事情があつて、仕方なく」行う授与を表す (14) (15) (16)。相手の事情に応じてやってやる行為を表すことから、やはりイクスにも恩を売るようなニュアンスが生じ、目上の相手にはやや使いにくい。(15) (16) のようにイクスは補助動詞用法を有する。

(14) アイツァ モノ ホシガッタモンヤデ イクイタワイ

「あいつが物を欲しがったものだからあげたよ」

(15) カネガ ナイヤカ ホンナラ ウラガ コーテイクソ

「金がないのか、なら私が買ってあげよう」

(16) ウラガ カワリニ カイテイクソ

【手がかじかんで字がうまく書けない様子を見て】「私が代わりに書いてあげよう」

2.1 に示した通り五箇山方言では「～テイクス」が「相手にそれをする能力がないために代わりにやってやる」という文脈で用いられる。上打波方言のイクスもほぼ同じ意味・用法を共有していると言える。なお石川県内浦方言 (2.2) にはイクスの補助動詞用法が認められず (日高 2007: 239), 筆者が知る限りでは福井県安島方言でもイクスは補助動詞用法を持たない。北陸地方の中でもイクスが補助動詞用法を持つ地域は白山麓周辺に限定されている可能性がある。

4.2 遠心的クレルの使用条件

前節ではヤル、クレル、イクスの意味・用法を対照した。続いては、モダリティ的・構文的な条件も含めて、クレルが遠心的用法で使用され得る条件（ヤルとクレルの使い分け）をより詳しく分析・整理していく。以下、(17) の3つの変数について検証する。

- (17) a. 授与の与え手（話し手）と受け手の上下関係（孫＝目下，父親＝目上と想定）
b. 文タイプ（意志文か叙述文か）
c. 構文的特徴（本動詞か補助動詞か）

まず一つ目のパラメータ（与え手と受け手の上下関係）に関して，受け手が目上の人である場合，待遇上の配慮の必要性からクレルが使いにくくなることは前節 (13) にすでに示した。目下の受け手に対してはクレルを用いることができる (18)。

- (13) オツツァネ ミヤゲオ {ヤッタ／#クレタ／#イクイタ}

「（私は）父親に土産をあげた」

- (18) マゴネ ミヤゲオ {ヤッタ／クレタ／イクイタ}

「（私は）孫に土産をあげた」

二つ目のパラメータ（意志文か叙述文か）は石川県内浦方言 (2.2) のように文タイプによってクレルの使用可否が変わる方言の存在を踏まえて設定されるものである。すでに (12) に示したように，過去の行為を客観的に叙述する文では目上の人物（父親）に対するクレルの使用は不適切になるが，意志文においては「きつい言い方」でベストな選択ではないもののクレルが許容される (19)。

- (13) オツツァネ ミヤゲオ {ヤッタ／#クレタ／#イクイタ}

「（私は）父親に土産をあげた」

- (19) オツツァネ ミヤゲオ {ヤロ／?クレヨ／イクソ}

「（私は）父親に土産をあげよう」

また補助動詞用法においては叙述文でのクレルの使用が完全に許容されなくなる (20)。対照的に意志文ではクレルが問題なく使用できる (21)。

- (20) マゴネ ミヤゲオ コーテ {ヤッタ／*クレタ／イクイタ}

「（私は）孫に土産を買ってあげた」

- (21) マゴネ ミヤゲオ コーテ {ヤロ／クレヨ／イクソ}

「（私は）孫に土産を買ってあげよう」

三つ目のパラメータ（本動詞か補助動詞か）に関しては、すでに上に言及がある通り、叙述文ではクレルは補助動詞用法を持たないことが明らかになっている。(18) (20) を再掲する。

(18) マゴネ ミヤゲオ {ヤッタ／クレタ／イクイタ}

「（私は）孫に土産をあげた」

(20) マゴネ ミヤゲオ コーテ {ヤッタ／*クレタ／イクイタ}

「（私は）孫に土産を買ってあげた」

以上、話し手と受け手の上下関係、意志文か叙述文か、本動詞か補助動詞か、の3つの変数についてクレルの使用に与える影響を明らかにした。その結果を表1にまとめる。

表1 遠心的クレルの使用可否

受け手	意志文		叙述文	
	本動詞 「あげよう」	補助動詞 「～てあげよう」	本動詞 「あげた」	補助動詞 「～てあげた」
孫	○	○	○	×
父親	○	×	×	×

ここで検証したすべての条件が関与することが分かる。まず基本的に目上の受け手に対する使用は語用論的に不適切であり、かつ叙述文においては補助動詞用法を持たない。叙述文に補助動詞用法がない点は、日高（1997）が指摘したクレルの遠心的用法に関する二つの通方言的傾向（①本動詞用法で遠心的用法を保持しやすく補助動詞用法で失いやすい、②意志文で遠心的用法を保持しやすく叙述文で失いやすい）と一致する特徴である。

4.3 求心的授与動詞とその待遇語

クレルは最も一般的な求心的授与動詞である。与え手がやや目上の人物（父親）である場合にも用いられる（22）。僧侶のような特に高い敬意を払う人物に対しては尊敬語（タモル、オグレル）の使用が必須である（23）。また目下の与え手に対してはクレルの軽卑語にあたると考えられるカス（「貸す」に対応）を用い得る（24）（25）（26）。カスは侮辱語というわけではなく、「無理にやらせる」というニュアンスを伴うことがある。カスは4.5で再度取り上げる。なおヤルは求心的授与を表せない（27）。

(22) オツツァガ ウラネ ミヤゲオ {クレタ／イクイタ／タモッタ／オグレタ}

「父親が私に土産をくれた」

(23) ボンサマガ ウラネ ミヤゲオ {#クレタ／#イクイタ／タモッタ／オグレタ}

「お坊さんが私に土産をくれた」

- (24) マゴガ ウラネ ミヤゲオ {クレタ／イクイタ／カシタ}
「孫が私に土産をくれた」
- (25) マゴガ ウラネ ミヤゲオ コーテ {クレタ／イクイタ／カシタ}
「孫が私に土産を買ってくれた」
- (26) カワリニ ヨンデ {クレ／カセ}
【弟に】「代わりに読んでくれ」
- (27) ワヤ ウラネ ミヤゲオ {*ヤッタ／クレタ／イクイタ} ヤコ
「お前は私に土産をくれたのか」

4.4 まとめ（ヤル，クレルの分布）

遠心的用法（4.2）と求心的用法（4.3）を合わせて、改めて2種の授与動詞（ヤル，クレル）の使い分け・分布を表2にまとめる。

表2 ヤル，クレルの使用範囲（ヤ＝ヤル，ク＝クレル）

遠心的授与					求心的授与		
意志文		叙述文			叙述文		
受け手	本動詞 「あげよう」	補助動詞 「～てあげよう」	本動詞 「あげた」	補助動詞 「～てあげた」	与え手	本動詞 「くれた」	補助動詞 「～てくれた」
孫	ヤ／ク	ヤ／ク	ヤ／ク	ヤ	孫	ク	ク
父親	ヤ／ [?] ク	ヤ	ヤ	ヤ	父親	ク	ク

ヤルが全ての遠心的用法において使用可能で、すでに汎用的な遠心的授与動詞として確立している。ヤルとクレルが併用される場合、クレルの方が待遇面での配慮を欠いた（相手に恩を売るようなニュアンスの）表現になる。ヤルが遠心的なクレルを駆逐しつつある途中過程（西日本方言に見られるヤルとクレルの対立が確立しつつある段階）にあると考えられる。

4.5 遠心的カスの使用条件

最後に、4.3 で求心的クレルの軽卑語として取り上げたカスが補助動詞用法においてのみ遠心的授与行為を表し得ることを付け加えておく（28）～（31）。

- (28) マゴネ ミヤゲオ {ヤッタ／クレタ／*カシタ⁴}
「（私は）孫に土産をあげた」
- (29) マゴネ ミヤゲオ コーテ {ヤッタ／*クレタ／カシタ}
「（私は）孫に土産を買ってあげた」

⁴ カスの本義〈貸す〉と衝突する（「貸す」のか「あげる」のか紛らわしい）ため本動詞用法を欠いているか。

(30) マゴネ ミヤゲオ {ヤロ／クレヨ／*カソ}

「(私は) 孫に土産をあげよう」

(31) マゴネ ミヤゲオ コーテ {ヤロ／クレヨ／カソ}

「(私は) 孫に土産を買ってあげよう」

上例の通り遠心的カスは補助動詞用法専用である。反対に、叙述文において遠心的クレルは本動詞用法専用であり、欠けている用法を相補する分布を見せる。次の表3は表2にカスの使用領域を追記したものである。ヤルよりも待遇価が低い表現としてクレルとカスが、求心的クレルの軽卑語としてカスがその役割を担っており、ヤル、クレルにカスを合わせた3語が、マイナスの待遇表現も含めた一つの授与動詞パラダイムを形作っていることがわかる。

表3 ヤル、クレル、カスの使用範囲 (ヤ＝ヤル, ク＝クレル, カ＝カス)

遠心的授与					求心的授与		
意志文		叙述文			叙述文		
受け手	本動詞 「あげよう」	補助動詞 「～てあげよう」	本動詞 「あげた」	補助動詞 「～てあげた」	与え手	本動詞 「くれた」	補助動詞 「～てくれた」
孫	ヤ／ク	ヤ／ク／カ	ヤ／ク	ヤ／カ	孫	ク／カ	ク／カ
父親	ヤ／ [?] ク	ヤ	ヤ	ヤ	父親	ク	ク

なお『日本国語大辞典 第二版』によれば、近世後期上方の洒落本などに「貸す」が補助動詞化して遠心的または求心的授与行為（「～てやる」または「～てくれる」の意）を表す用例が見られる (32)。上打波方言のカスはこの近世上方語の用法が伝播したものか、上打波で独立に「貸す」が授与動詞化したものか、現時点では定かでない。

(32) いったいとふいふ訳じゃ咄してかしんか

(『十界和尚話』五)

5. 総括

本稿では大野市上打波方言における授与動詞体系の一端を明らかにした。特にクレルが求心的授与だけでなく遠心的授与をも表し得る（クレルにかかる人称・視点制約が緩い）ことに注目し、中立的な遠心的授与動詞ヤルとの使い分けを中心に解説した。遠心的なクレルはある程度限定された条件下でのみ使われる。まず、行為の受け手が与え手に対して恩恵意識を抱くことが期待される含意があり目上の人物には用いにくい。また意志文と比べて叙述文では使いにくい、叙述文においては補助動詞用法を欠くといった文タイプの違いによる制限も有する。遠心的クレルのみ適格になる（ヤルが使えない）環境は確認されておらず、クレルはやがて遠心的用法を失っていく（ヤルやカスに置き換えられていく）ものと考えられる。

クレル（クル）は中古語において視点制約を持たず遠心的・求心的授与どちらも表したが、その後中世末期までに求心的授与動詞へ転じ用法を縮小させた（古川 1995）。中央語史の視点に立てば、クレルの遠心的用法は中世以前の古態をとどめる特徴である。富山県五箇山、石川県白峰、そして福井県上打波という白山麓の 3 方言に共通してクレルの遠心的用法が残存していることは、北陸地方内部における白山麓方言の古態性を示す特徴の一つと考えることができる。

参考文献

- 古川俊雄（1995）「授受動詞「くれる」「やる」の史的変遷」『広島大学教育学部紀要 第二部』44, 193–200.
- 新田哲夫（1985）「石川県白峰方言のアクセント体系」『金沢大学文学部論集文学科篇』5, 97–116.
- 新田哲夫（2005）『石川県白峰地方の方言特徴と方言テキストの語法』金沢大学文学部.
- 日高水穂（1994）「越中五箇山方言における授与動詞の体系について：視点性成立過程への一考察」『国語学』176, 125–114.
- 日高水穂（1997）「授与動詞の体系変化の地域差：東日本方言の対照から」『国語学』190, 119–108.
- 日高水穂（2007）『授与動詞の対照方言学的研究』ひつじ書房.
- 平山輝男（1953）「福井県嶺北地方の音調とその境界線」『音声学会会報』83, 1–4.
- 平山輝男（1954）「福井県嶺北地方の音調とその境界線 その 2」『音声学会会報』84, 21–24.
- 松倉昂平（2023）「福井県大野市に走る東西アクセント境界線について」『東京大学言語学論集』45, 125–140.

文焦点 (Thetic) 文における主題標示とその条件の再検討

——宮崎県椎葉村尾前方言を中心に——

廣澤尚之

九州大学大学院 博士後期課程／日本学術振興会特別研究員／国立国語研究所 共同研究員

要旨

宮崎県椎葉村尾前方言では、文焦点 (Thetic) 文の一部で主語が主題助詞で標示される。筆者はこれまで、この際の条件を、①主語が文脈に既出であるか、②存在 (Presentational) ではなく出来事を表す (Event-reporting) 文であるとき、と記述してきた。本稿では追加調査の結果を踏まえ、主語を標示する形式の交替に、新たに述語のアスペクトが関与していることを報告する。

筆者はこれまでの研究で日琉諸方言の主語を標示する形式の交替原理を説明する「情報構造のクロスモデル」を提案してきた。今回このモデルに新たな変数 (述語のアスペクト) を組み込み、改訂することを提案する。さらに、追加調査を通じて発見した新たな変数の候補についても簡単に報告する。*

キーワード：九州方言、琉球諸語、情報構造、類型論、アスペクト

1. はじめに

情報構造の研究では一般に、文全体が焦点となる文焦点 (Thetic) は主題を持たないとされている (Lambrecht 1994, 2000)。しかし、宮崎県椎葉村尾前方言¹は、文焦点文の一部で主語が主題助詞を取ることがある (焦点部分を下線で示す)。以下の例で、(1a)は述語焦点構造、(1b, c)は文焦点構造の例であるが、(1c)で主題助詞ワが生じうる点に注意されたい。なお、助詞“ワ”は、(1a)に見るように、通常のトピックコメント構造 (述語焦点構造) で義務的に生じる主題助詞である。“ノ”は主格助詞であり、“Ø”は無助詞 (ハダカ) を表している。

- (1) a. 「タクシー来た？」と聞かれて
ハイヤー{ワ/*ノ/*Ø} 来タゼ。
「タクシー来たよ。」

述語焦点

*本研究は JSPS 科研費 23KJ1712 「判断文・現象文」類型における特殊構文の再検討：方言バリエーションに着目して (代表者：廣澤尚之) の助成を受けている。本研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」(プロジェクトリーダー：山田真寛) の研究成果である。本研究は廣澤他 (近刊) を土台とし、それを発展させたものだが、廣澤他 (近刊) を含む論集の編集作業の遅れにより、本稿の方が先に公開されることをおことわりしておく。

¹ 宮崎県椎葉村尾前方言は宮崎県東臼杵郡椎葉村の西北部で話されている方言であり、話者人口はおよそ 100 人である。系統は未詳であるが、方言区画上は九州方言のうち豊日方言、その中でも特に日向北方言に属するとされる (徳川ほか 1994)。本研究のデータは 80 代女性 1 名のイディオレクトに基づく。断りのない限り全て筆者が調査したフィールドデータである。

- b. 不意にきたタクシーを見て
ハイヤー{ノ/*ワ/*Ø} 来タゼ。
「タクシー来たよ。」
- c. 呼んだタクシーを待っていて、見つける。
ハイヤー{ノ/ワ/*Ø} 来タゼ。
「タクシー来たよ。」

文焦点

文焦点

本稿の第一の目的は、尾前方言におけるこの現象の記述の精緻化である。加えて、以降の節でみていくように、一般に文焦点と解釈可能な環境においてこのように主題助詞が出現可能な方言が他にもみられることにも注目する。本稿の第二の目的は、どのような文焦点で主題助詞が出現可能かを通方言的に記述・説明するために筆者が提案した「情報構造のクロスモデル」を、尾前方言や他方言の最新の調査結果をもとに改訂することである。

本稿の構成は以下の通りである。2 節では、尾前方言の文焦点 (Thetic) において主題助詞が出現する条件について、従来指摘されてきた 2 つの変数を示すとともに、その変数をもとに筆者が提案してきた「情報構造のクロスモデル」について述べる。続く 3 節では、追加調査の結果発見した新たな変数 (アスペクト) について述べるとともに、この新たな変数を盛り込んだ「情報構造のクロスモデル」 (改訂版) を提示する。

2. 尾前方言に関するこれまでの論点

前節で述べたように、尾前方言では文焦点 (Thetic) の一部が主語に主題助詞をとりうる方言である。本節ではこの問題に対するこれまでの研究をまとめる。以下 2.1 節では、文焦点 (Thetic) という用語について整理する。2.2 節、2.3 節では先行研究にて指摘されてきた、尾前方言の文焦点 (Thetic) が主題助詞を取りうる 2 つの条件をそれぞれ記述する。続く 2.4 節では、それら 2 つの条件を組み合わせた「情報構造のクロスモデル」を導入し、その通方言的な有用性を述べる。

2.1 文焦点 (Thetic) について

尾前方言の詳細に立ち入る前に、本稿で重要な概念となる文焦点 (Thetic) に関する用語の整理を行なっておく。前提との差異になる部分を焦点 (下線で示す) と呼ぶとき、文は焦点の領域に基づいて述語焦点 (2a) , 項焦点 (2b) , 文焦点 (2c) に分類できる (Lambrecht 1994: 222) 。

- (2) a. 「車はどうしたの？」に対して
車は故障したよ。
- b. 「バイクが故障したの？」に対して
いや、車が故障したんだよ。
- c. 「何が起きたの？」に対して
車が故障したんだよ。

述語焦点

項焦点

文焦点

このうち、文焦点は通言語的に有標な形式（英語における **there** 構文など）を取りやすいことが知られている（Sasse 1987, 2006, Lambrecht 2000）。出現する文脈にも偏りがあり，Macías（2016）は（3）で示すような文を文焦点に挙げている（大文字は強勢を表す）。

(3)	a.	There are three Tasmanian devils in the zoo.	存在 (Existentials)
	b.	It is snowing.	天候 (Weather statements)
	c.	HERE's John.	提示 (Presentatives)
	d.	My HEAD hurts.	物理的感覚 (Physical Sensation)
	e.	The POPE died.	ニュース (Hot news statements)

談話の観点からは，しばしば先行文脈のない out of the blue な文と呼ばれ（Selkirk 1984: 217）²，談話に話題を導入する文であるとされる（Lambrecht 1994: 185）。文焦点は哲学，特に判断論では，Thetic judgement を表す文とされる。Thetic judgement は，主語と述語との対応関係で真偽が決まる通常の判断（Categorical judgement）と異なり，全体が分割しがたい 1 つの事態の認識である判断である（Kuroda 1972, Macías 2016）。焦点や判断の構造を言語形式とは独立に判定することは極めて難しく，文焦点（Thetic）の通言語的な同定基準は設定しがたいと言われるが（Sasse 2006），本稿では通言語的に文焦点（Thetic）になりやすいとされている（3）のような文，特に存在・出現を表現する発見文（3c）を文焦点（Thetic）の典型例とみなす。これらの文は日本語学で「現象文」（三尾 1948: 64, 仁田 1991: 122）や「存現文」（佐治 1991）と呼ばれる文に相当する。

2.2 文焦点（Thetic）における主題標示

尾前方言において文焦点（Thetic）が主題助詞を取りうることを最初に報告したのが三井（2020）である。三井（2020）では，文焦点（Thetic）ではなく「現象文」（仁田 1991: 122）という用語を使用し，以下の（4）のような現象文が主題助詞を取りうることを示している³。

- (4) タクシー{Ø/ワ/ガ/ノ} オッタ。
 （タクシーを探していて）「あ，タクシーいた。」（三井 2020（1））

三井（2020）によれば，現象文であっても主題を持つ（4）のような文は，尾前方言では主語が主題助詞を取れるという。この研究は，文焦点（Thetic）が主題を持たないとする従来の常識を覆した重要な論文である。しかし，主題を持つ文なら主題助詞を取れる，という記述はほとんど同

² この点に関しては Sax（2012）の反論がある。

³ 筆者により表記をカナに改めている。本稿では扱わないが，以下のような疑問文の例も挙げている。

(i) タバコ{ガ/ノ/ワ/Ø}アルカイ。
 （道端で唐突に）「タバコある？」（三井 2020（2））

語反復であり、主題助詞が出現する条件は十分に記述されていない。その問題を解決しようとした研究が Shimoji and Hirose (2022) である。Shimoji and Hirose (2022) は主題助詞が出現する条件は主語が活性化していることであると主張した。(4) の場合、「タクシーを探している」という発話場面では、談話の中で「タクシー」が活性化しており、そのことが主題助詞の出現を許していると分析される。しかし、以下の (5) を見ると、主題助詞の出現条件は必ずしも活性化の有無とは限らないことが分かる。

- (5) a. 家に遊びに来た友人が帰宅しようとしている。タクシーを呼んだが、なかなか来ない。友人と「タクシーいつ来るかな」と話している。
ア ハイヤー{ノワ} ジョーセキ キタ。
(友人に) 「あ、タクシーちゃんと来た。」
- b. 家に遊びに来た友人が帰宅しようとしている。タクシーを呼んだが、友人はそのことをすっかり忘れてバスの時刻表をみながら「いつのに乗ろうかな」と話している。
ハイヤー{ノワ} キタ。
(友人に) 「タクシー来た。」

活性化あり

活性化なし

(5b) では、少なくとも聞き手の中でタクシーが活性化しているとは考えられないが⁴、主題標示を許している。この事実は、Shimoji and Hirose (2022) の記述の不備を示唆している。この問題を踏まえ、筆者の一連の研究 (廣澤 2023a, b, 廣澤他近刊) では、「主語が文脈に既出か否か」が条件であると分析している。(5) は活性化の有無といった聞き手の心理状態に関わらず、タクシーという指示対象が一度談話に登場していれば主題助詞を取れると説明される。

以上のように、文焦点 (Thetic) が主題助詞を取りうる時の条件として、先行研究ではまず主語の指示対象に対する活性化や先行詞の有無といった旧情報性に注目がなされてきた。

2.3 存在 (Presentational) と出来事 (Event-reporting)

筆者の一連の研究 (廣澤 2023a, b, 廣澤他近刊) では、尾前方言で文焦点 (Thetic) が主題助詞を取りうるもう一つの条件として、文焦点 (Thetic) が (存在を導入するのではなく) 「出来事そのものを導入すること」という条件を提案した。Lambrecht (1994: 144) によると、文焦点 (Thetic) には存在を導入する Presentational と出来事を導入する Event-reporting の下位区分がある⁵。Presentational は述語が「いる」のような存在動詞や「来る」のような出現を表す動詞であり (6a)、Event-reporting は述語が主語の存在・出現だけでなく、出来事の具体的なありさまについての情報を含んでいる (6b)。

⁴ 本稿では詳しく議論しないが (5b) は活性化の有無が話し手と聞き手では異なりうるという問題も提起する。

⁵ Sasse (1987) も同様の分類 (Entity-central と Event-central) を提案している。

- (6) a. あ、太郎が{いる, 見える, 来る etc.}よ。
b. あ、太郎が{倒れてる, 踊ってる, 歌ってる etc.}よ。

Presentational
Event-reporting

尾前方言では、文焦点 (Thetic) のうち、Presentational (7a) は主題助詞を取らないが、Event-reporting (7b) は主題助詞を取ることができる。

- (7) a. 山道で急に信号を見つける。
信号{ノ/ワ} アッタフー。
「信号があったよ。」
b. 山道で急に倒れた信号を見つける。
信号{ノ/ワ} 倒レトルフー。
「信号が倒れてるよ。」

Presentational
Event-reporting

2.4 情報構造のクロスモデル

文焦点 (Thetic) における尾前方言の主題標示は、(8)に示すような条件によって可能となることがわかってきたと言える。

- (8) 尾前方言の文焦点 (Thetic) は、以下の①、②のいずれかの条件を満たすとき、主語が主題助詞を取りうる。
- ① 主語が文脈に既出である
 - ② 存在 (Presentational) ではなく出来事を表す (Event-reporting) 文である。

ここで、①と②の条件は互いに独立しているため、これらを掛け合わせることで、文焦点 (Thetic) を2掛ける2の4通りに区分するクロス表を考えることができる。更に、②について、文焦点の2つに加えて、主語が問題なく主題で標示される述語焦点文 (Categorical Sentence) を加えると2掛ける3のクロス表になる (表1)。のちに見ていくように、このクロス表を想定することで、文焦点 (Thetic) における尾前方言の主語の主題表示にとどまらず、主語の標示に関する方言バリエーション (主格, 主題, ハダカ) を統一的に説明・予測できる。これを「情報構造のクロスモデル」と呼ぶ (廣澤 2023a, b, 廣澤ほか近刊)。以下で、このモデルを詳しく説明する。

表1: 「情報構造のクロスモデル」

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New			
Old			

それぞれのセルに当てはまる文がどのようなものか、以下では尾前方言の例を挙げて示す⁶。

(9)	不意にタクシーが来る。 ハイヤーノ 来タガ。 「タクシー来たよ。」	Presentational/New
(10)	予約したタクシーを待っている。 ハイヤー{ノ/ワ} 来タガ。 「タクシー来たよ。」	Presentational/Old
(11)	ふと部屋の時計を見上げると、針が進んでいない。 時計{ノ/ワ} 止マツトルフー。 「時計が止まってるようだ。」	Event-reporting/New
(12)	出発前に道しるべにしようと話し合っていた信号機が倒れているの見える。 シンゴーキ {ノ/ワ} タオレシャカ シタフー。 「信号機倒れてしまったようだ。」	Event-reporting/Old
(13)	ふと時計を見上げると針が進んでいない。 アノ 時計ワ 止マツトルフー ⁷ 。 「あつ、あの時計止まってるようだ。」	Categorical/New
(14)	「タクシーもう来た？」と聞かれて答える。 ハイヤーワ モー 来タガ。 「タクシーはもう来たよ。」	Categorical/Old

尾前方言の主語が取る助詞をこのクロスモデルに従って整理すると、表2のようになる。

表2：尾前方言の主語の取る助詞

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	主格・主題	主題
Old	主格・主題	主格・主題	主題

⁶ (11)～(13)では、話者の方が「フー」（～ようだ）をつけて発話されたため、そのまま掲載している。なお、「フー」があってもなくても主語の取る助詞の振る舞いに影響はないことを類似の例文において確かめている。

⁷ (11) との違いは、「アノ」というダイクシス表現があることである。ダイクシス表現の有無によって Event-reporting/New と Categorical/New を分けることの妥当性については、廣澤他（近刊）を参照されたい。

このクロスモデルは他方言の記述でも有効である。以下の標準語、鹿児島県いちき串木野市方言での調査結果を見られたい⁸。主語要素の新旧 (New vs. Old) は標準語でも串木野方言でも, Presentational と Event-reporting の違いは串木野方言において助詞の交替に關与している。

表 3 : 標準語の主語の取る助詞 (∅ はハダカを表す)

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格・∅	主格・∅	∅
Old	∅	∅	主題・∅

表 4 : 鹿児島県いちき串木野市の主語の取る助詞

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	主格	主格・主題
Old	主格・主題	主題	主題

情報構造のクロスモデルは、諸方言の助詞の分布に存在する二つの共通性を可視化している。第一に、上述の尾前方言も含め、いずれの方言でもこのモデルの左上に位置する Presentational/New のセルの文は主語が主格助詞を取り、右下に位置する Categorical/Old のセルの文は主語が主題助詞を取る。第二に、主格助詞は Presentational/New から、主題助詞は Categorical/Old から連続的に分布していき、それぞれの形式がせめぎ合っている。これを一般化すると、いずれの方言でも主格助詞と主題助詞は表 5 のような分布をし、表 6 のような分布はしないのである。

表 5 : 助詞分布の通方言的一般化

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	⇒	↑
Old	↓	⇐	主題

表 6 : 予測しないパターン

	Presentational	Event-reporting	Categorical
New	主格	主格	主題
Old	主題	主格	主題

⁸ 標準語は筆者内省、串木野方言は筆者フィールドデータに基づく。具体的な調査例文は appendix を参照。

3. アスペクトの影響

本節では、上記の情報構造のクロスモデルに新たな観点（アスペクト）を盛り込む必要性を論じ、モデルを改訂する。

3.1 問題となるデータ

まず、改訂の根拠となる事実として、尾前方言のデータを検討してみたい。前述の通り、尾前方言では Event-reporting で主語が主題助詞を取りうるが、従来筆者が収集していた Event-reporting の例文はいずれも述語が「たまたま」結果相アスペクトのものであった。試みに述語が進行相アスペクトの例文を調査してみたところ（15a）、主題助詞が容認されないことが分かった。これはこれまで調査してきた結果相の例文（15b）とは異なる結果である。

- (15) a. 電話が鳴ったので家人に伝える。
電話{ノ/*ワ}鳴リウォルゴタルガ。
「電話が鳴ってるみたいだよ。」
- b. 時計が止まっているので家人に教える。
時計{ノ/ワ}止マツトルフー。
「時計が止まってるようだよ。」

進行相

結果相

（15）は述語のアスペクト以外にも主語や述語の動詞も異なるため、以下の（16）に主語や述語を揃えた擬似ミニマル・ペアの例を挙げる。

- (16) a. 夜寝ていると、ポタポタと水が漏れる音が聞こえる。
アラ ドッカ 水{ノ/*ワ} ボリオルゴタルガ。
「あら、どこか水が漏れているようだ。」
- b. 洗面台に溜めた水がなくなってしまうのに気づく。
アラ 水{ノ/ワ} ボットルガ。
「あら、水が漏れている。」

進行相

結果相

この結果は、従来のモデルに修正が必要なことを示唆している。すなわち、Event-reporting の文は常に無条件で主題助詞による主語標示を許すわけではなく、述語のアスペクトが結果相の時に限られるのである。以上を踏まえ、2.4 節の（8）で提示していた条件を以下の（17）に修正する。

(17) 本研究での提案

尾前方言の文焦点（Thetic）は、以下の①、②のいずれかの条件を満たすとき、主語が主題助詞を取りうる。

- ① 主語が文脈に既出である
- ② 存在（Presentational）ではなく出来事を表す（Event-reporting）文である。ただし、述語のアスペクトが結果相のときに限る。

3.2 モデルの改訂

2.3 節において、尾前方言の Event-reporting では、述語のアスペクトが進行相か結果相かによって振る舞いが異なることを示した。これを踏まえ、クロスモデルの Event-reporting を表 7 のように二分割することを提案する。この分割は、上述した助詞交代の通方言的な一般化（表 5）に異例を生じさせるものではない。

表 7：改訂版クロスモデルによる尾前方言の主語標示

	Presentational	Event-reporting		Categorical
		進行	結果	
New	主格	主格	主格・主題	主題
Old	主格・主題	主格・主題	主題	主題

Event-reporting/New におけるアスペクトの対立（例文 16）を再掲する。さらに Event-reporting/Old におけるアスペクトの対立を（18）に示す。

(16)	a.	夜寝ていると、ポタポタと水が漏れる音が聞こえる。 アラ ドッカ 水{ノ/*ワ} ボリオルゴタルガ。 「あら、どこか水が漏れているようだ。」	Event-reporting/New 進行相
	b.	洗面台に溜めた水がなくなってしまうのに気づく。 アラ 水{ノ/ワ} ボットルガ。 「あら、水が漏れている。」	Event-reporting/New 結果相
(18)	a.	水が漏れていた箇所を自分で塞いでみた。今晚は大丈夫かと 耳を澄ませてみると、やはり水の漏れる音が聞こえる。 ヤッパ マーダ 水{ノ/ワ} ボリオルフー。 「やっぱりまだ水が漏れているようだ。」	Event-reporting/Old 進行相
	b.	栓の欠けたところを接着剤で塞いで、もう一回水を張ってみる。 10 分くらいしてもう一度見に行ってみる。 ヤッパ 水{*ノ/ワ} ボットルガ。 「やっぱり水が漏れている。」	Event-reporting/Old 結果相

3.3 他方言での検証

本節では今回のモデルの改訂が他の方言の記述でも有効なのかを確認する。以下の例は南琉球宮古語与那覇方言の例である⁹。それぞれの形式について述べる。“ヌ”は主格助詞，“ヌドゥ”は主格助詞に焦点助詞がついたもの，“ワ”（母音/i/のあとはヤで実現）は主題助詞である。この方言では Event-reporting の文において、主語が初出（New）のときも（19），既出（Old）のときも（20），述語のアスペクトが主語を標示する形式の交替に関与する。

(19)	a.	電話が鳴ったので家人に伝える。 電話{ヌ/ヌドゥ/*ワ} ナリュウ。 「電話が鳴ってる。」	Event-reporting/New 進行相
	b.	時計が止まっているので家人に教える。 時計{*ヌ/ヌドゥ/ヤ} トゥマリドゥウー。 「時計が止まってるよ。」	Event-reporting/New 結果相
(20)	a.	奥さんが電話を待っている。電話がかかってきた。 電話{ヌ/ヌドゥ/*ワ} ナリュウ。 「電話鳴ってる。」	Event-reporting/Old 進行相
	b.	今何時か隣の部屋に見に行ってくれと頼まれ、隣の部屋に見に行くと、針が進んでいない。 時計{*ヌ/*ヌドゥ/ヤ} トゥマリドゥウー。 「時計止まってる。」	Event-reporting/Old 結果相

与那覇方言の調査結果を示すと表 8 のようになる。この結果は、与那覇方言においても Event-reporting をアスペクトで二分する有効性を示唆しており、データの欠損がある Presentational/Old を除外すれば、2.4 節の表 5 で示した通方言的な助詞の分布原理にも沿っている。

表 8：改訂版クロスモデルによる与那覇方言の主語標示

	Presentational	Event-reporting		Categorical
		進行	結果	
New	ヌドゥ	ヌ/ヌドゥ	ヌドゥ/ワ	ワ
Old	不明	ヌ/ヌドゥ	ワ	ワ

このことから、情報構造のクロスモデルにおいて Event-reporting をアスペクトによって分割することには一定の合理性があると考えられる。今後の他方言での検証が待たれるところである。本

⁹ 筆者が実施した郵便調査に基づく。

稿では 2.4 節で標準語と串木野方言を取り上げているが、筆者内省によれば標準語ではアスペクトは変数にならない。串木野方言についてはこの点についてまだ調査が及んでいない。

3.4 アスペクトによる分割と時間性

上述したアスペクトによる分割を日本語学の文類型、特に叙述類型論（益岡 1987）の観点から検討する。叙述類型論では事象叙述 vs. 属性叙述を区別する¹⁰。事象叙述とは「花子が走った。」「犬が泳いでいる。」などの文で、属性叙述は「花子は学生だ。」「犬は可愛い。」のような文である。両者の違いには時間性が関わっており、時間の推移によって展開するか否かと、主格「が」vs. 主題「は」の交替が連動するとされる（影山 2009, 2012 : iv）（図 1）。

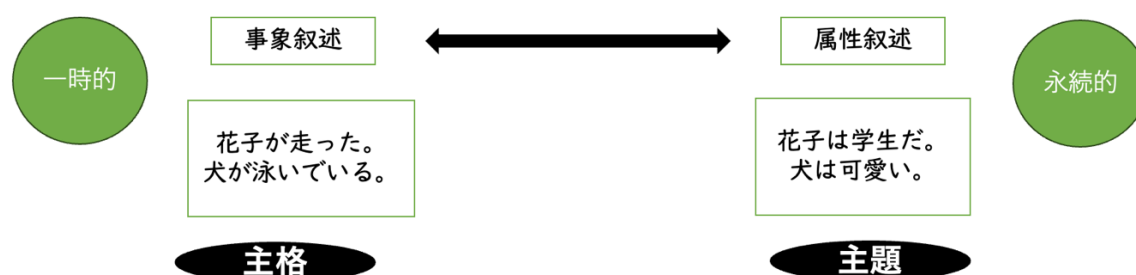


図 1：叙述類型論と時間性

本稿ではアスペクト、特に進行相と結果相の違いを問題にしてきたが、一般には進行相の方がより一時的であり、結果相の方がより永続的であると考えられる。時間的展開の有無と主格/主題交替が連動するという叙述類型論の見方を受け入れると、述語が進行相の方が主語は主格助詞を取りやすく、述語が結果相の方が主語は主題を取りやすいことが予測される（図 2）。

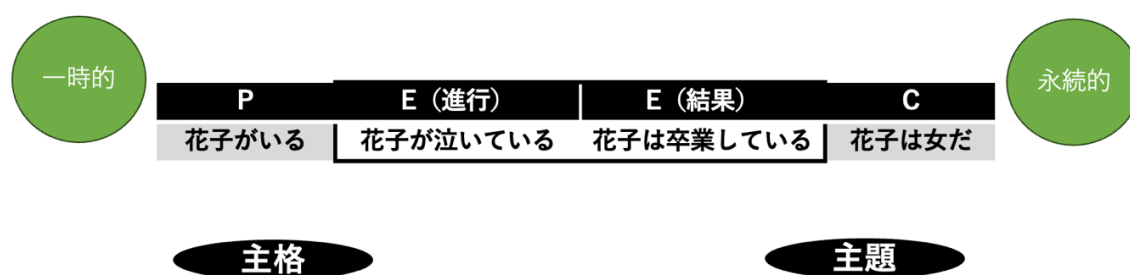


図 2：アスペクトと時間性

本稿で示してきた通り、実際に尾前方言や与那覇方言ではその予想に沿う結果が確認された。Event-reporting を進行相と結果相に分けた時、左側に進行相、右側に結果相を配置することは、単にそうすることによって提案してきた助詞分布の一般法則（主格助詞は Presentational/New から、

¹⁰ 佐久間（1941）や寺村（1973）の、物語文 vs. 品定め文、三尾（1948）や仁田（1991）の、現象文 vs. 判断文とも並行的な分類である。

主題助詞は Categorical/Old から分布) (表 5) に沿う結果となるからではなく、時間性の観点からも支持される整理と言える。

4. 今後の課題

今後の課題を 3 点述べる。1 点目に、今回提案した改訂版の「情報構造のクロスモデル」の有効性はまだ尾前方言と与那覇方言でしか検証されていない。今後調査地を増やして検証するとともに、新たな条件がないか探索していく必要がある¹¹。この過程で、アスペクトを更に分割したり (将然相と進行相で振る舞いが異なるなど)、Categorical の中でもアスペクトによる分割の必要が生じたり (結果相では主題助詞が許されるが継続相ではそうでないなど) する方言が見つかる可能性がある¹²。

2 点目に、情報構造のクロスモデルにおける New/Old の区別、特に何をもって旧情報とみなすかの基準を再考する必要がある。今回の追加調査において、主題助詞の出現が予想されない Presentational/New の例文において主題助詞が出現しているデータが散見された。それらはいずれも、主語が文脈に既出ではないが何らかの点で旧情報と見なせる可能性がある文脈で発話されていた。以下に具体例を示す。最初の例は探索の文脈で発話された例である。(21) の主語の「種」は文脈に既出ではないが、話し手の念頭にある、という意味で旧情報性があると言える。

(21) 種を買いたいと思って農協に行き、種を見つける。

コケー 種{ノ/ワ} アッタフー。

(独り言) 「ここに種あった。」

Presentational/New

次に、呼び止めの文脈で発話された例である。(22a) の主語の「筆入レ」は文脈に既出でも、現在念頭にあるわけでもないが、聞き手が忘れていたものを思い出させている、という意味で旧情報性があると捉えられている可能性がある。なおこの主語の「筆入レ」は、話し手が聞き手のものであるという確信を持たない限り、主題助詞を取れない (22b)。

(22) a. 足元に聞き手の筆箱を見つけて呼び止める。

アレ 筆入レ{ノ/ワ} アル。

「あれ、筆箱がある。」

b. 足元に聞き手の筆箱を見つけて呼び止める。

アレ 筆入レ{ノ/*ワ} アルガ、ワレガトカイ。

「あれ、筆箱があるけど、あなたのものか？」

Presentational/New

Presentational/New

¹¹ 諸方言比較用の統一調査票 (ver.1) を zenodo にて公開している。

(DOI : <https://doi.org/10.5281/zenodo.12630171>)

¹² 通方言的に Event-reporting 将然相<継続相<結果相<Categorical 将然相<継続相<結果相の順に主題標示されやすくなることが予想されるが、これを検証するためのデータは現時点ではいずれの方言に対しても無く、今後の課題である。

従来筆者は文脈に既出かどうかを New/Old の基準としてきたが、これらの例はこの基準の再考を促すものである。新情報と旧情報ははっきりと二分できるものではなく、多段的な概念である (Chafe 1984, Prince 1981, 1992, Lambrecht 1994, etc.)。今後 New/Old の基準の再検討と、それを可能にする調査例文セットの作成が課題となる。

今後の課題の3点目として、注3に挙げた疑問文の問題がある。すでに注3の(i)のような疑問文の各方言における特徴的な振る舞いについては調査に着手しているが、これについては別の機会に報告したい。

5. おわりに

本稿では、文焦点 (Thetic) における主題標示をテーマに尾前方言の記述と通方言的な一般化を行なった。2節では尾前方言におけるこれまでの記述を確認するとともに、筆者が提案している通方言的な「情報構造のクロスモデル」を紹介した。3節では、追加調査によって新たに述語のAspectが変数となっていたことを示すとともに、「情報構造のクロスモデル」にこの変数を取り込んで改訂することを提案した。4節では新たな変数の可能性について、現時点のデータによって初期報告を行った。

参考文献

- Chafe, Wallace L (1984) Cognitive constraints on information flow. In Russell Tomlin (ed.) *Coherence and grounding in discourse*, 21–51. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 廣澤尚之 (2023a) 「宮崎県椎葉村尾前方言における情報構造」修士論文：九州大学.
- 廣澤尚之 (2023b) 「Thetic vs. Categorical の対立における Event-reporting 文の位置付け：日本語諸方言における主題助詞・主格助詞の出現と韻律句形成から」日本言語学会第166回大会.
- 廣澤尚之・松岡葵・下地理則 (近刊) 「方言変異からみる「ハもガも使えない文」—宮崎椎葉尾前方言、鹿児島串木野方言、標準語の対照を通して」竹内史郎・下地理則・小西いずみ (編) 『日琉諸語における情報構造と文法現象』東京：ひつじ書房.
- 影山太郎 (2009) 「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136: 1-34.
- 影山太郎 (2012) 「まえがき」影山太郎 (編) 『属性叙述の世界』i - xiii. 東京：くろしお出版.
- Kuroda, Shige-Yuki (1972) The categorical and the thetic judgement evidence from Japanese syntax. *Foundations of Language* 9 (2): 153-185.
- Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form: Topic, focus and the mental representations of discourse referents*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lambrecht, Knud (2000) When subjects behave like objects: An analysis of the merging of S and O in sentence-focus construction across languages. *Studies in Language* 24:3. 611-682.
- Macías, Jose Hugo García (2016) From the Unexpected to the Unbelievable-Thetics, Miratives and Exclamatives in Conceptual Space. PhD dissertation: University of New Mexico.

- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法 日本語文法序説』 東京：くろしお出版.
- 三尾砂 (1948) 『国語法文章論』 東京：三省堂.
- 三井桃子 (2020) 「宮崎県椎葉村尾前方言における主題標示の再検討—標準語との対照を通して—」
卒業論文：九州大学.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 東京：ひつじ書房.
- Prince, Ellen F (1981) Towards a taxonomy of given-new information. In: Peter Cole (ed.) *Radical Pragmatics* 223-255. New York: Academic Press.
- Prince, Ellen F (1992) The ZPG Letter: Subjects, Definiteness, and Information-status. In: William C. Mann and Sandra A. Thompson (eds.) *Discourse Description: Diverse linguistic analyses of a fund-raising text* 295-325. Amsterdam: John Benjamins.
- 佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』 東京：ひつじ書房.
- 佐久間鼎 (1941) 『日本語の特質』 東京：育英書院.
- Sasse, Hans-Jürgen (1987) The thetic/categorical distinction revisited. *Linguistics* 25: 511–580.
- Sasse, Hans-Jürgen (2006) Theticity. In: G. Bernini & M. L. Schwarz (eds.) *Pragmatic organization of discourse in the languages of Europe*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Sax, Daniel J (2012) Not quite ‘out of the blue’? Towards a dynamic, relevance-theoretic approach to thetic sentences in English. In: Piskorska, Agnieszka (ed.) *Relevance Studies in Poland* 4, 24-53. Warsaw: Warsaw University Press.
- Selkirk, Elizabeth O. (1984) *Phonology and syntax: The Relation between Sound and Structure*. The MIT Press.
- Shimoji, Michinori and Naoyuki Hirose (2022) Shiiba (Western Japanese). In: Michinori Shimoji (ed.) *An Introduction to the Japonic Languages: Grammatical Sketches of Japanese Dialects and Ryukyuan Languages*. 293-329. Leiden: Brill.
- 寺村秀夫 (1973) 「感情表現のシンタクス：「高次の文」による分析の一例」 『月刊言語』 2-2. 東京：大修館書店.

Appendix

1. 標準語の主語標示

(23)	不意にタクシーが来る。 あつ、タクシー{ガ/Ø} 来たよ。	Presentational/New
(24)	予約したタクシーを待っている。 あつ、タクシーØ 来たよ。	Presentational/Old
(25)	電話がかかって来た。 あつ、電話{ガ/Ø}鳴ってるよ。	Event-reporting/New 進行相
(26)	ふと部屋の時計を見上げると、針が進んでいない。 あつ、時計{ガ/Ø}止まってるよ。	Event-reporting/New 結果相
(27)	家人が電話を待っている。電話がかかってきた。 あつ、電話Ø 鳴ってるよ。	Event-reporting/Old 進行相
(28)	家人に頼まれて隣の部屋の時計を見に行く。 あつ、時計Ø 止まってるよ。	Event-reporting/Old 結果相
(29)	ふと時計を見上げると針が進んでいない。 あつ、あの時計Ø 止まってるよ。	Categorical/New
(30)	「タクシーもう来た？」と聞かれて答える。 タクシー{ハ/Ø} もう来たよ。	Categorical/Old

2. 串木野方言の主語標示

(31)	不意にタクシーが来る。 タクシーガ 来タ。 「タクシー来た。」	Presentational/New
(32)	予約したタクシーを待っている。 ア、タクシー{ガ/ワ} 来タヨ。 「タクシー来たよ。」	Presentational/Old
(33)	ふと部屋の時計を見上げると、針が進んでいない。 アレ トケーガ トマッコッ。 「あれ、時計が止まってる。」	Event-reporting/New 結果相
(34)	出発前に道しるべにしようと話し合っていた信号機が倒れているの見える。 シンゴーキワ タオレチョラオ。 「信号機倒れてるよ。」	Event-reporting/Old 結果相

- | | |
|---|------------------------|
| <p>(35) ふと時計を見上げると針が進んでいない。
アン 時計{ガ/ワ} 止マッコッ。
「あの時計止まってるよ。」</p> | <p>Categorical/New</p> |
| <p>(36) 「タクシーもう来た？」と聞かれて答える。
モー タクシーワ 来チョッド。
「もうタクシーは来てるよ。」</p> | <p>Categorical/Old</p> |

3. 与那覇方言の主語標示（本文で提示した Event-reporting の例文を除く）

- | | |
|--|------------------------------------|
| <p>(37) 庭で急に蛇をみつける。
アバ！ パヴヌドゥ ウー。
「あつ蛇がいる！」</p> | <p>Presentational/New</p> |
| <p>(38) 蛇を探していて、みつける。
ウヤ！ パヴ！
「あつ！蛇！」</p> | <p>Presentational/Old</p> |
| <p>(39) 電話がかかって来た。
電話{ヌ/ヌドゥ} 鳴リュー。
「電話が鳴ってる。」</p> | <p>Event-reporting/New
進行相</p> |
| <p>(40) ふと部屋の時計を見上げると、針が進んでいない。
時計{ヌドゥ/ヤ} トマリドゥウー。
「時計が止まってる。」</p> | <p>Event-reporting/New
結果相</p> |
| <p>(41) 家人が電話を待っている。電話がかかってきた。
電話{ヌ/ヌドゥ} 鳴リュー。
「電話鳴ってる。」</p> | <p>Event-reporting/Old
進行相</p> |
| <p>(42) 家人に頼まれて隣の部屋の時計を見に行く。
時計ヤ 止マリドゥウー。
「時計止まってる。」</p> | <p>Event-reporting/Old
結果相</p> |
| <p>(43) ふと時計を見上げると針が進んでいない。
カヌ 時計ヤ 止マリドゥウー。
「あの時計止まってる。」</p> | <p>Categorical/New</p> |
| <p>(44) 「探してた蛇いた？」と聞かれて答える。
シー パッヴァ（パヴ＝ワ）ウータムン。
「うん、蛇いたよ。」</p> | <p>Categorical/Old</p> |

北琉球沖縄語伊平屋方言の疑問文の構造とイントネーション

カルリノ・サルバトーレ

大東文化大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

本稿では沖縄語伊平屋方言の疑問文の構造とイントネーションの実現について概観する。本稿ではまずこれまでの研究でまだ十分に記述されていない点を明確にする。次に伊平屋と伊平屋方言の概要をあげ、主な先行研究、アクセント体系について説明する。そして疑問詞疑問文で使われる疑問語と、共起する形式を概観する。次に肯定疑問文で現れる、疑問を現す形式を概観する。次にそれぞれの疑問文のタイプのイントネーションの実現を概観する。最後に、新たに得られた知見をまとめ、残された課題について述べる。

キーワード：琉球諸語，沖縄語，伊平屋方言，イントネーション，疑問文

1. はじめに

本稿では北琉球沖縄語伊平屋方言の疑問文の構造とイントネーションの実現を記述する。筆者のこれまでの伊平屋方言の研究で伊平屋方言のイントネーションについて次のことが明らかになっている：

- 疑問を表す形式がない場合（すなわち、疑問標識のない肯定疑問文）にのみ上昇する音調を取るという木部（2010, 2019）で「相補タイプ」とされている類型である。
- 疑問を表す形式が使用される場合、下降あるいは平板な音調が見られる。

今までの研究で肯定疑問文のイントネーションについて、=i という疑問形式に着目して記述を行った。ただし、=i が直接名詞に接続して出現するデータが欠けていた。さらに、肯定疑問文で使われるもう一つ形式、=na という疑問形式のデータもなかった。本稿では、追加調査によって得られたデータに基づいて、これまでの研究で残されていた課題に取り組む。

2. 背景

2.1 伊平屋と伊平屋方言

伊平屋方言は北琉球語群沖縄語に所属し、沖縄県伊平屋村で話されている。伊平屋村は沖縄本島北部本部半島の北に位置しており、伊平屋島と野甫島からなる。伊平屋村は伊平屋島にある田名、前泊、我喜屋、島尻と、野甫島にある野甫という5つの集落に分けられている。国勢調査の最新のデータによると、人口は1,126人で、そのうち65歳以上は333人である。伊平屋方言の主な話者層は50代以上であるため、話者数は300～400人程度だと推定できる。

2.2 先行研究

伊平屋方言の主な先行研究として、Carlino による記述文法 (Carlino 2019) や文法スケッチ (Carlino 2022) がある。イントネーションの初期的な記述として Carlino (2018a, b) の報告がある。

2.3 アクセント

本節で伊平屋方言のアクセント体系を概観する。伊平屋方言はいわゆる A, B, C の 3 つの型が区別される三型アクセントである (Carlino 2019)。これは琉球祖語について再建されている 3 つの A, B, C のアクセント系列 (松森 2012) におおよそ対応する。1 音節名詞は A と B の 2 つの型の区別しかない。各アクセント型はピッチの上昇で対立する。ピッチを担う単位はモーラである。それぞれの型の実現が次の通りである。A 型：つねに高始まり。B 型：単独で語末モーラに上昇がある。ただし、複数の助詞が連続する場合は 1 番目の助詞の最終モーラに上昇がある。3 モーラ助詞 =nkan の場合は 2 番目のモーラに上昇がある。C 型：語末モーラに上昇がある。表 1 でそれぞれの型の実現の例を挙げる。

表 1 伊平屋方言の名詞のアクセント体系

1	A	毛	[kii	[kii=ga	[kii=madi	[kii=madi=nu	[kii=nkan
	B	木	ki[i	kii=[ga	kii=ma[di	kii=ma[di=nu	kii=n[kan
2	A	鼻	[hana	[hana=ga	[hana=madi	[hana=madi=nu	[hana=nkan
	B	のみ	numi[i	numi=[ga	numi=ma[di	numi=ma[di=nu	numi=n[kan
	C	蚤	nuu[mi	nuu[mi=ga	nuu[mi=madi	nuu[mi=madi=nu	nuu[mi=nkan
3	A	東	[agari	[agari=ga	[agari=madi	[agari=madi=nu	[agari=nkan
	B	日本	jamatu[u	jamatu=[ga	jamatu=ma[di	jamatu=ma[di=nu	jamatu=n[kan
	C	キャベツ	tama[na	tama[na=ga	tama[na=ma]di	tama[na=ma]di=nu	tama[na=madi=nu

3. 調査・データの概要

本研究のデータは 2017 年～2024 年の間に現地調査によって収集された。調査協力者は伊平屋村字田名の 60 代の男性話者 3 名である。その他に、伊平屋村字島尻の 60 代の男性話者 1 名のデータも参照している。データは次のものからなる：

- 1) 日本語共通語の文から翻訳されたもの。
- 2) 発表者が用意した伊平屋村の文法性判断調査で使用したもの。
- 3) 自然談話から抽出したもの。

データの分析は Praat (Boersma and Weenink, 2024) を使用して f0 曲線の変動の観察によって行った。

4. 疑問文の構造

本節では疑問文に現れる形式を概観する。ここで疑問語と、疑問を表す接辞、接語を表す形式をまとめて「疑問形式」と呼ぶことにする。疑問語を除いた他の形式は「疑問標識」と呼ぶ。本稿で取り上げる疑問標識は次の通りである。

表 2 各疑問標識と確認されている可能な接続先

疑問詞疑問文	-(j)oo	動詞・形容詞
	=ga	名詞・動詞・形容詞
肯否疑問文	=i	名詞・動詞・形容詞
	=na	名詞・動詞 (コピュラのみ確認)

次に疑問詞疑問文の構造と肯否疑問文の構造を概観する。

4.1 疑問詞疑問文の構造

疑問詞疑問文では疑問語と、疑問詞疑問文専用の疑問標識が使用される。まず疑問語の体系を概観し、その次に疑問標識を取り上げる。

4.1.1 疑問語の体系

伊平屋方言の疑問語を表3にまとめる。疑問場所代名詞として2つの形式が観察されているが、そのうち maa は本島方言からの借用の可能性はある。

表 3 疑問語の体系

疑問人称代名詞	taa	tattaa
疑問代名詞	nuu	
疑問場所代名詞	maa / daa	
疑問時間副詞	iči	
選択疑問名詞	duuri	
疑問数量名詞	čassa	
疑問数詞	iku-	
疑問理由名詞	nuuga	
疑問副詞	ičan	

4.1.2 疑問標識

本節では疑問語と共起する疑問標識を概観する。伊平屋方言では疑問標識の省略も不可能である。疑問標識として、接語である助詞の =ga と接尾辞の -(j)oo がある。=ga の接続先が自由で、動詞・形容詞で語幹をホストとする。-joo は動詞・形容詞のみをホストとしてとり、直接動詞語根に接続する。語根末の分節音が子音の場合 j が削除され、-oo として実現する。形容詞の場合、形容詞語幹に接続する。形容詞語幹とは、形容詞語根と形容詞接尾辞 -sa(ha)からなるものである。

- (1) nuu=ga a-joo?
何=NOM ある-WHQ
「なにがある？」
- (2) maa=ke nz-oo?
どこ=ALL 行く-WHQ?
「どこに行く？」
- (3) nuu=ga fussa-joo?
何=NOM ほしい-WHQ
「なにがほしい？」
- (4) nuu num-u=ga
何 飲む-NPST=WHQ
「何を飲む？」

- (5) ari=ja taa in=ga?
 あれ=TOP 誰.GEN 犬=WHQ
 「あれは誰の犬？」

- (6) ari=ja nuu ja=ga
 あれ=TOP 何 COP=WHQ
 「あれは何だ？」

4.2 肯否疑問文の構造

肯否疑問文では、文末に =i と =na という 2 つの疑問標識が使用される。まず =i を取り上げる。

=i は名詞、動詞、形容詞に接続できると確認されている。名詞では =i として実現する。名詞には直接 =i として実現する。動詞、形容詞の場合、mi という表層形が見られる。本稿では深入りしないが、これは、現在の体系では -n である直説法接辞が -m であった過去の段階において、直説法接辞と =i とが融合した形が、現在まで保持された結果であるとみられる。

- (7) nuu num-u-m=i?
 何 飲む-NPST-IND=YNQ
 「何を飲む？」
- (8) nuu=gara fussa-m=i?
 何=EXM ほしい.ADJ-IND=YNQ
 「なにかほしい？」

もう一つの疑問標識は =na である。=na は名詞に直接後続することができるが、コピュラ動詞に後続することも可能である。意味のレベルでは確認要求などのニュアンスがない。

- (9) uri=ja fuuga ja-n=na?
 これ=TOP 卵 COP-IND=YNQ
 「これは卵か？」
- (10) uri=ja fuuga=na?
 これ=TOP 卵=YNQ
 「これは卵か？」

4.3 疑問標識の過去形の実現

伊平屋方言では疑問標識の =i と =ga は、接続先が過去形を取っているときに、非過去形と異なる異形態として現れる。=i は tii として（肯否疑問文）、=ga は =a として実現する（疑問詞疑問文）。

- (11) nuu=gara uti-tii?
何=EXM 落ちる-PST.YNQ
「何か落ちた？」

- (12) nuu=te i-ta=a
何=QT 言う-PST=WHQ
「何と言った？」

-tii の由来について本稿では深入りしないが、=ga が =a として実現するというのは、通時的に見ると -tii に対応する類推変化と考えられる。

- (13) koo-ta=ga → koo-ta=a

-ta の後にそのまま =ga が接続する場合もあるが、この実現は沖縄本島諸方言で見られ、借用語の可能性はある。

5. イントネーションの実現

最後に、各形式のイントネーションの実現を記述する。まず疑問詞疑問文と肯否疑問文のイントネーションの実現を見る。最後に、疑問形式がない場合の実現を見る。

5.1 疑問詞疑問文の文末イントネーション

疑問詞疑問文では、=ga の場合でも -joo の場合でも下降調が見られる。

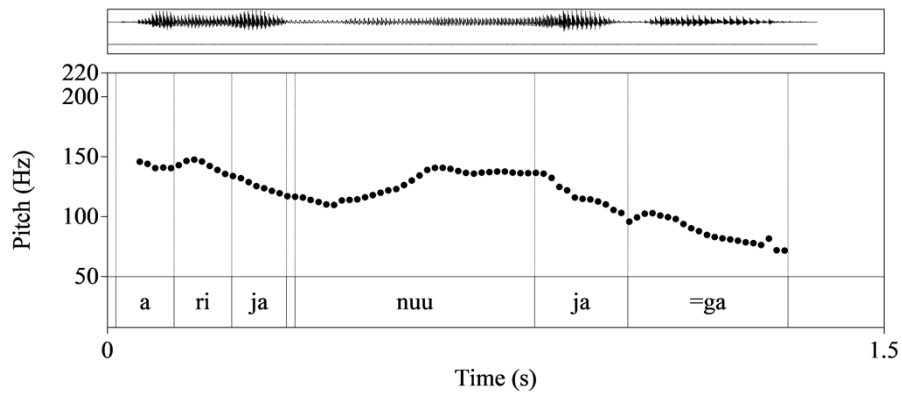


図 1 =ga の例

- (14) ari=ja nuu ja=ga?
 あれ=TOP 何 COP=WHQ
 「あれはなんだ？」

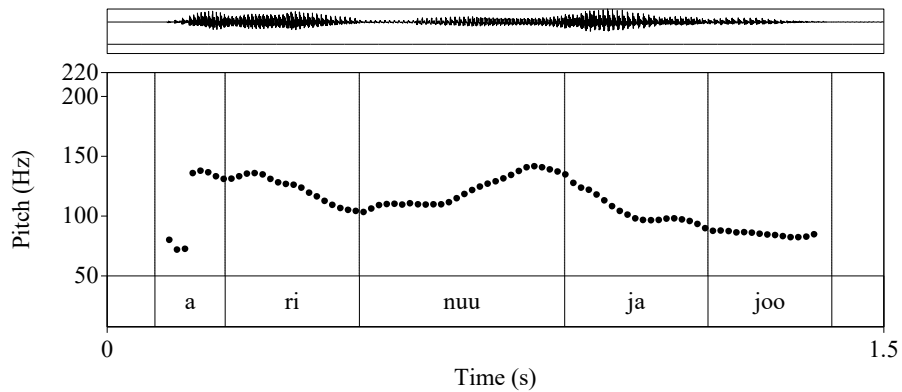


図 2 -joo の例

- (15) ari=ja nuu ja-joo?
 あれ=TOP 何 COP=WHQ
 「あれはなんだ？」

5.2 肯否疑問文の文末イントネーション

肯否疑問文では疑問標識によって異なる実現が観察された。具体的には、=i をとる肯否疑問文は高くて平板な音調をとる一方（図 3, 4），=na をとる肯否疑問文（図 5, 6）は下降する音調をとる

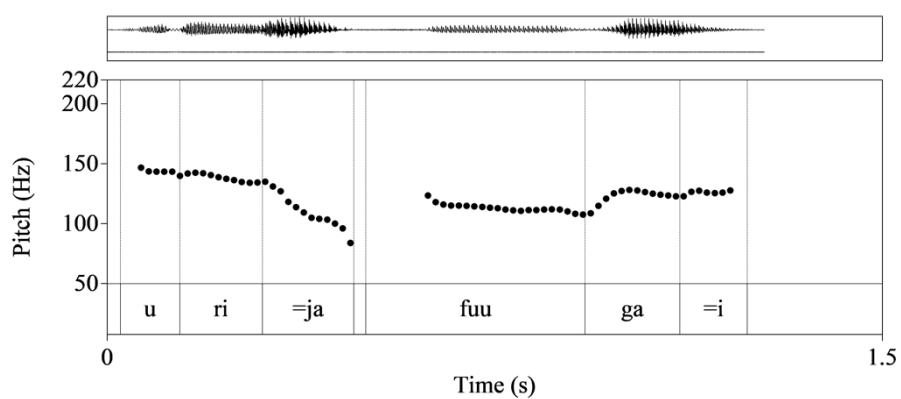


図2 =i の例

(16) uri=ja fuuga=i?

これ=TOP 卵=YNQ

「これは卵か？」

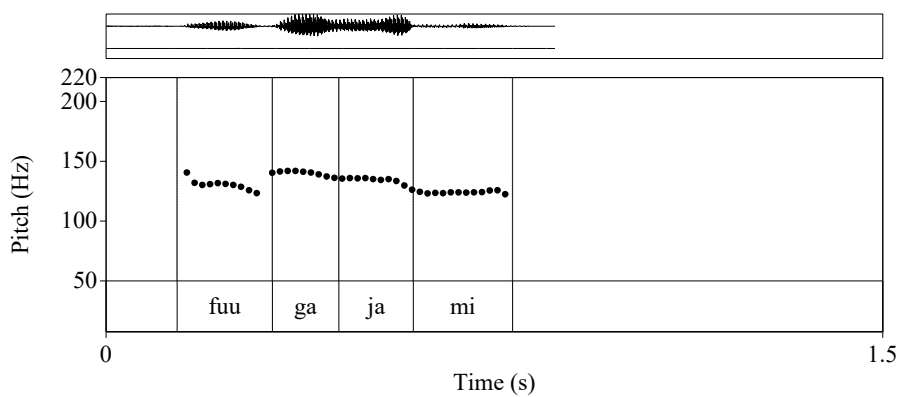


図3 コピュラと =i の例

(17) fuuga ja-m=i?

卵 COP-IND=YNQ

「卵なのか？」

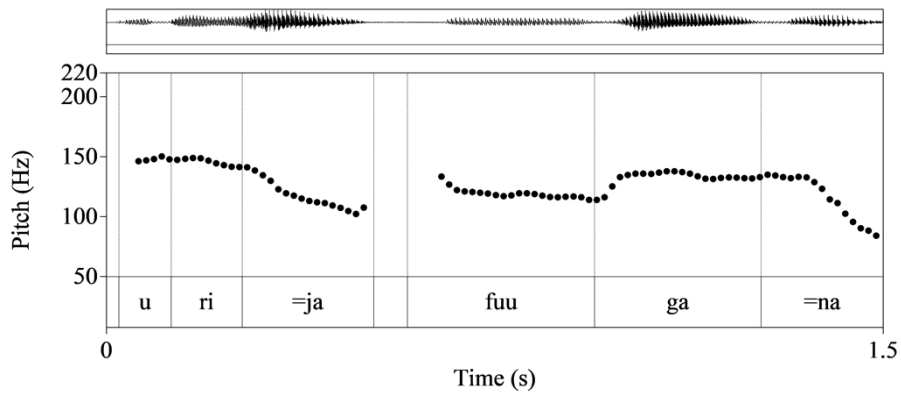


図4 =na の例

(18) uri=ja fuuga=na?

これ=TOP 卵=YNQ

「これは卵か？」

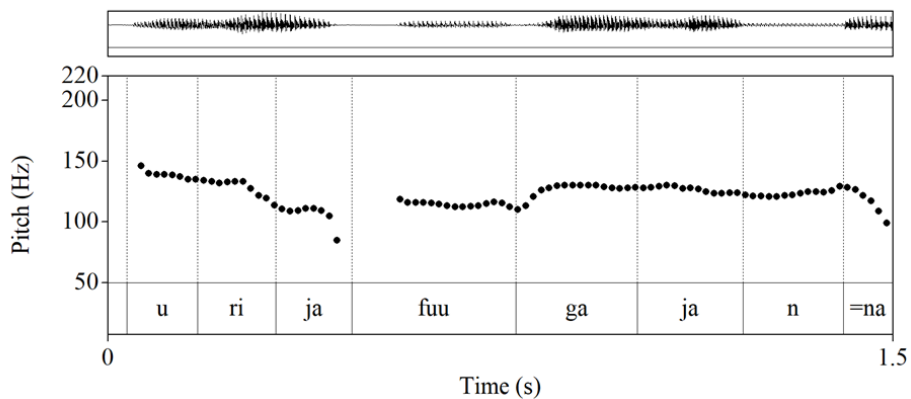


図5 コピュラと =na の例

(19) uri=ja fuuga ja-n=na?

これ=TOP 卵 COP-IND=YNQ

「これは卵か？」

5.3 疑問標識がない場合のイントネーション

疑問標識がない場合に、上昇調が見られる。ただし、典型的な質問文では疑問標識の省略が不可能である。疑問標識が省略されるのは、相手の発言を繰り返して質問するときのみであり、その場合、上昇するイントネーションが見られる。これはいわゆる Echo question である。図7では自然談話から抽出された発話である。一人の話者が瓶玉を重ねたものを「だるま」と呼んでい

て、理解しなかったもう一人の話者が繰り返して「だるま？」と質問する。このときに疑問標識がなく、上昇調が見られる。

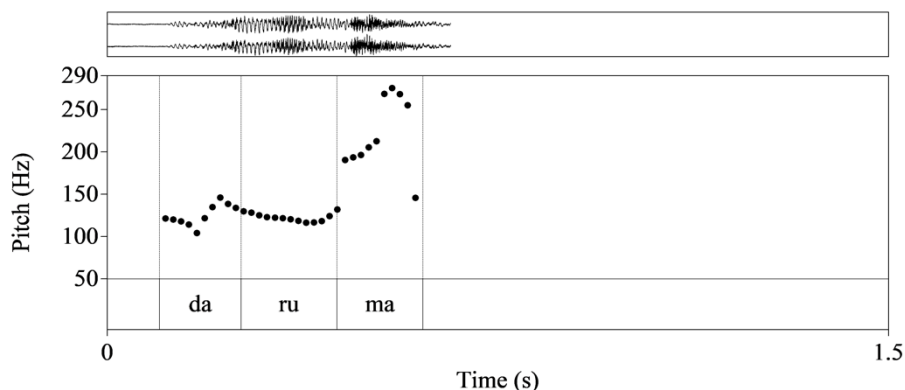


図 6 疑問形式がない例

(20) daruma?

だるま

「達磨？」

6. まとめと今後の課題

今までの研究で疑問を表す形式がない場合にのみ上昇する音調を取るという類型であることがわかっていった。ただし、記述は一部の疑問形式に偏っていた。本稿で新たに得られた知見として肯否疑問文で使用される =na という形式では下降が見られることがあげられる。=i を使った肯否疑問文のデータと、疑問詞疑問文を使ったデータだけを見れば、疑問詞疑問文では下降、肯否疑問文では平板調があると解釈してしまう恐れがあったが、=na のデータでは肯否疑問文でも下降音調が見られることがわかる。

最後に残る課題は、まだ明らかではないアクセント型とイントネーションの関係の有無を検討することである。そして、今までの研究では典型的な質問のイントネーションだけを見てきたが、今後は修辭疑問文など、他の疑問文の種類に着目し、イントネーションを明らかにする必要がある。

参考文献

- Boersma, Paul & Weenink, David (2024) Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. Version 6.4.13, retrieved 10 June 2024 from <http://www.praat.org/>
- Carlino, Salvatore (2018a) 「伊平屋島尻方言の疑問文の文末イントネーションについての初期報告」日本音声学会第 337 回研究例会, 甲南大学.
- Carlino, Salvatore (2018b) Sentence-final interrogative intonation in the dialect of Iheya, Okinawa. Paper

read at the NINJAL ICPP 2018 – 5th NINJAL International Conference on Phonetics and Phonology.

National Institute of Japanese Language and Linguistics, 29 October 2018.

Carlino Salvatore (2019) 「北琉球沖縄語伊平屋方言の文法博士論文」 博士論文, 一橋大学.

Carlino Salvatore (2022) "Iheya (Okinawan, Northern Ryukyuan)" in Michinori Shimoji ed. *An Introduction to the Japonic Languages: grammatical sketches of Japanese dialects and Ryukyuan languages*, Brill.

木部暢子 (2010) 「イントネーションの地域差—質問文のイントネーション」 小林隆・篠崎晃一 (編) 『方言の発見：知らざる地域差を知る』 1-20. 東京: ひつじ書房

木部暢子 (2019) 「疑問文の文末音調による系統内類型論の試み—イントネーション研究のために—」 『国語と国文学』 1142: 3-13

松森晶子 (2012) 「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」 『音声研究』 16 (1) : 30-40.

略号一覧

ALL 方向格

COP コピュラ

EXM 例示

GEN 属格

IND 直説法

WHQ 疑問語疑問文

NOM 主格

PST 過去

QT 引用

TOP 主題

YNQ 肯否疑問文

宮古語大神島方言の助辞 *kami* と *ta:si* のふるまい

——助辞 *kami* の意味の拡張をめぐって——

金田章宏

千葉大学 名誉教授／国立国語研究所 共同研究員

要旨

宮古語大神島方言の助辞には、日本語マデに対応する *kami* と *ta:si* に、日本語と同様に格（終了限界）ととりたて（極端な例）の用法がある。大神島方言の *kami* には以上の用法のほかに、他の多くの琉球諸語の焦点化助辞 *du*（大神島方言では *tu*）の用法に似た対比・焦点化の用法がみられる。

大神島方言の *kami* は焦点化から当為性へと意味の範囲を広げ、当為性からはさらに、のべたて文をはたらきかけ文にする＝述語動詞がのべたて形のままではたらきかけ文にする＝という用法が派生する。当為性をあらわす文はのべたて文なのでテンスの対立をもつが、未来の当為的な意味が二人称に向けられることにより、テンス対立のないはたらきかけ文に移行するのである。

キーワード：宮古語，大神島方言，助辞，当為性，はたらきかけ文

1. はじめに

本稿は宮古語大神島方言の文法書を作成するためのパーツの一部を整理したものである。したがって、特段の主張は示さない。以下に、例とともに本稿の概要を示す。

大神島方言の助辞には、日本語「まで」に対応する *kami* と *ta:si* に、日本語と同様に格（終了限界）ととりたて（極端な例）の用法がある。この用法は周辺の宮古語諸方言の対応形式にも比較的広くみられるものである。

方言の訳のほうでは、焦点化助辞 *tu*（他の多くの琉球諸語の *du* に対応）の箇所に機械的にゾを対応させるが、コピュラや融合などで対応が困難な場合は省略する。また、訳はできるだけ直訳的にしてあるので、日本語としては不自然なところもある。

“[” と “]” は音調をあらわす記号であり、それぞれピッチの上がり目と下がり目を指す。また、！はそのあとの母音の無声化をしめす。*kS* は強い摩擦をとまって発音される *k* で、*S* は音節主音的な機能をはたしている。

本稿で使用したデータは、大神島在住の狩俣英吉氏（1925 年～2023 年。調査期間 2013 年～2023 年）、および伊佐照雄氏（1949 年生。調査期間 2023 年～）による。

・格 空間の限界点

(1) *uma=kami*] *katiru*. ここまで耕せ。

(2) *kama=nu pari]=ta:[si]* *a[ka*. あその畑まで歩こう。

・格 時間の限界点

(3) jozi=kami] uma=N mati:ri. 4時までここで待っている。

(4) Nnama]=ta:[se: (<*ta:si=ja) ikSti]=tu uŋ. いままでは生きてゾいる。

・とりたて 極端な例

(5) kari=kami=tu] k!isi. あいつまでゾ来た。(ハダカ主格)

(6) kari]=ta:si=[tu] nara:si. あいつ(に)までゾ教えた。(ハダカ与格)

大神島方言の **kami** には以上の用法のほかに、琉球諸語一般にみられる焦点化助辞 **du** の用法に似た対比・焦点化の用法がみられる。この用法も周辺の一部の方言で確認されている。一方、大神島方言の **ta:si** のほうにはこうした用法、およびこれ以降の用法はみられない。

(7) kama=N=kami=tu] aŋ kumata. (間違いなく) あそこにゾあるはずだ。

大神島方言の **kami** は、焦点化からさらに当為性へと意味の範囲を広げる。

(8) kare: ma:takina=kami=tu] num. あいつは(当然) いっしょにゾ飲む。(にぎやかなのが好きだから)

当為性からはさらに、のべたて文をはたらきかけ文にする＝述語動詞がのべたて形のままではたらきかけ文にする＝という用法が派生する。当為性をあらわす文はのべたて文なのでテンスの対立をもつが、未来の当為的な意味が聞き手に向けられることにより、テンス対立のないはたらきかけ文に移行するのである。

(9) ma:takina=kami=tu] num. いっしょにゾ飲もう。のべたて総合形による勧誘

(10) [ma:takina num=kami=tu sŋ. いっしょに飲みゾしよう。のべたて分析形による勧誘

本文で字下げした例文は比較のためにあげた **kami** を含まない例文である。また、字下げした文頭の > につづく文は、その上の問いなどの文を受けた文である。

2. 格の用法

範囲の限界点をあらわす。空間と時間の限界点が典型的である。

2.1 空間の限界点

○**kami** による空間の限界点

(11) uma=kami] katiru. ここまで耕せ。

(12) ki:=ja] kama=kami s[ke:]sati. きょうはあそこまで走る。(意志)

(13) ja:=kara im]=ka[me:] (<*kami=ja) u[te:. 家から海までは遠い。

○ta:si による空間の限界点

(14) ki:=ja] Nta=ta:si pu:ripa=tu [tau]kaŋ? きょうはどこまで掘ればゾいいか?

(15) kama=kara] uma=ta:si=na: assu. あそこらここまですれ。(=na: いつも, 毎回)

(16) uma]=ta:[se:] (<*ta:si=ja) ute:ffa] ne:N. ここまでは遠くない。(地図を見ながら)

なお, 限界点に対応する空間の開始点は kara 格であらわす。

(17) uma=kara ikStika: jura]ri=tu sŋ. ここから行ったら迷うよ。

2.2 時間の限界点

持続的な動作では限界点をあらわし(まで), 終了限界点を持つ動作や変化では限界点以前をあらわす(までに)。

○kami による時間の限界点, 限界点以前

・限界点

(18) jozi=kami] uma=N mati:ri. 4時までここで待っている。

(19) vva] ikS=kami=[mai] ukami:ri. あなたはいつまでも押んでいる。

・限界点以前

(20) pSsma=kami] assu. 昼までにやれ。

(21) icizi=kame:] ku:ta. 1時までには来ないと(いけない)。

限界以前の例に kamiN の例もみられるが, N を入れないほうが自然である。

(22) pSsma]=kami[N] nausi. 昼までに直しなさい。

○ta:si による時間の限界点, 限界点以前

・限界点

(23) jozi=ta:si] uma=N mati:ri. 4時までここで待っている。

(24) a[ta=ta:si=mai] a[ri:ŋ] kumata. あしたまでも(ものが)ある予定だ。あるはずだ。

・限界点以前

(25) pSsma]=ta:[si] asi:ki. 昼までにやっておけ。

(26) rokuzi]=ta:[se:] uki=tu sŋ. 6時までには起きゾする。

限界以前に ta:siN の例もみられるが, N を入れないほうが自然である。

(27) pSsma]=ta:si[N] nausi. 昼までに直しなさい。

なお、限界点に対応する時間の開始点は **kara** 格であらわす。

(28) ara:] Nnama=kara siNbunnu [ju]mati. 私は今から新聞を読みます。(siNbunnu < *siNbuN=ju)

3. とりたてマデの用法

大神島方言の **kami** と **ta:si** は、日本語のとりたてマデとおなじように極端な例であることをあらわす。他の存在を暗示したり、他との比較がある。

この用法には **kami** も **ta:si** もあらわれるが、大神島方言では **ta:si** のあらわれる用法の範囲はかなり狭い。**ta:si** の基本は主格、対格、与格の意味のハダカ形に使用され、格形式であらわれるのは共格の一部のみである。以下の **kami** の用法で☆がついているのは、**ta:si** にもある用法である。**kami** と **ta:si** の箇所には機械的に「まで」を対応させる。

3.1 **kami** による極端な例

○主格

- ・格表示なし☆

(29) kari=kami=tu kli]si. あいつまでゾ来た。

(30) mim=kami=tu] kauf nari. 耳までゾかゆくなった。

(31) aN=kami=tu] ɣai. 私までゾ怒られた。(受動動作の対象)

○対格

- ・格表示なし☆

(32) ffari]munu=kami=[tu] fai. 腐っているものまでゾ食べた。

(33) tu:]=kami=tu [fai. しっぽまでゾ食べた。

- ・格表示あり

(34) vva: kanu fa:=u=kami=tu nakastaɣ na]:? おまえはあの子どもをまでゾ泣かせたのか？

(35) ffari:] munu:=kami=tu [fai. 腐っているものをまでゾ食べた。

(36) u[ri:=kami] mu[ti ikati] na:? そんなものをまで持っていこうとするのか？

○与格 N

- ・格表示なし☆

(37) aNsi=nu] tukuma=kami=[tu aɣ. こんなところ (に) までゾある。

(38) umanaki]=kami=tu stirai uɣ. あちこち (に) までゾ捨てられている。(ゴミが)

(39) paka=ka]mi=[tu i]ki. 墓 (に) までゾ行った。

- ・格表示あり

(40) aNsi=nu] tukuma=N=kami=[tu aɣ. こんなところにまでゾある。

(41) uma=N]=kami=tu a₁. ここにまでゾある。

○与格 Nkai

・格表示あり

(42) kari=Nkai]=kami=[tu] nara:si. あいつにまでゾ教えた。

(43) paka=Nkai]=kami=[tu] iki. 墓にまでゾ行った。

○共格 sui

・格表示あり☆

(44) kari=sui]=kami=[tu] appi. あのひとまでゾ遊んだ。(いやなひと)

(45) kari=sui]=kami=[tu] fai. あのひとまでゾ食べた。(いやなひと)

○共格 tu

・格表示あり

(46) [i: vva: kari=tu=kami=tu asp₁[ta₁? え?おまえはあんなやつとまでゾ遊んだのか?

(47) [i: vva]: [kari=tu=kami=tu] num[ta₁? え?おまえはあんなやつとまでゾ飲んだのか?

○共格 sa:ri

・格表示あり

(48) kari=sa:ri=kami=tu] asp₁ta₁. あいつとまでゾ遊んだ。(顔をしかめて言う。)

○共格 sui

・格表示あり

(49) kare:] mus=sui=kami=[tu ap]pi:ɲ. あいつは虫とまでゾ遊んでいる。

○具格

・格表示あり

(50) unu] pau=si=kami=tu [ta]taki. この棒でまでゾ殴った。

○動詞肯定形

(51) Nma=ka=tu] fai=kami a₁. 母がゾ食べてまである。

○動詞否定形

(52) asi: fa:ta=kami=tu] aspi:ɲ. 昼飯を食べないでまでゾ遊んでいる。

(53) nivvata=kami=tu] asi:ɲ. 寝ないでまでゾやっている。

○動詞意志形

(54) ffi fa:ti:]=kami=tu u₁. 噛んで食べようとまでゾしている。(夫婦げんかなどで、かみついてやろうとまでしている)

(55) fa:ti:]=kami=tu u₁. 食べようとまでゾしている。(ふつう食べないものを)

(56) ukamati:]=kami]=tu u₁. 拝もうとまでゾしている。祈ろうとまでゾしている。①今やろうとしたのに! (「なにしてるの、早くしないと!」に対して言い訳的に言う。) ②悪いことをしてもものすごく反省している感じ。

(57) ffati:]=kami]=tu u₁. 降ろうとまでゾしている。降りそうだ。(降られたら困るのに!)

○修飾語☆

ここにみられるのは程度の修飾語（どのくらい）だけである。kami が基本的で、ta:si の例は少ない。情態の修飾語（どんなふうに）のほうは次に取り上げる焦点化になるようだ。

・モノの存在の量

(58) iciro:=ja] fa:=nu=tu [mi]ta:ɣ=kami uɿ. 一郎は子どもがゾ 3 人までもいる。

(59) usakana:=kami]=tu uɿ. たくさんまでゾいる。（魚が潮だまりにこんなにたくさん。驚き、意外性がある。）

(60) u[sakana:=tama=kami=tu aɿ. たくさんずつまでゾある。（たくさんずつ配当する分がある。）

・動作の主体や対象の量

(61) mita:ɣ=kami=tu] klisi:taɿ. 3 人までもゾ来ていた。（予定外）

(62) ki:=ja] aNsi:na:=kami=tu [k!isi] kl!isi. きょうはこんなにずつまでもゾ釣ってきた。

(63) miɿ]N:=kami]=[tu] mi:. 3 回までもゾ見た。

(64) Nma=ka=tu m:na=kami] fai aɿ. 母がゾみんなまでも食べてある。

・変化の量

(65) pStu]kSkɿ=N=tu ic!ikiro=kami u[taf] nari. ひと月にゾ 1 キロまでも太った。

(66) ic!ikiro=kami u[taf] nari ne:N. 1 キロまでも太ってしまった。

・狭義の程度

(67) uNsku=na:=kami]=[tu] jukurasi uske:ɿ] na:. こんなにまでもゾ汚して置いてあるねえ。

3.2 ta:si による極端な例

○主格

・格表示なし

(68) kanu] upuNma=ta:si=mai=[tu] puturi. あのオバアまでもゾ踊った。

(69) aka] kɿme:=N vva=ta:si siwa asi ura[ta] urapamai. 私のことであなたまで心配してなくても（いいよ）。

(70) aN=ta:si=tu] ɿai. 私までゾ怒られた。（受動動作の対象）

○対格

・格表示なし

(71) ɿwu=nu tu:]=ta:si=tu [fai. 魚のしっぽまでゾ食べた。

(72) ffari:ɿ] munu=ta:si=tu [fai. 腐っているものまでゾ食べた。

(73) unu] sara=ta:si=tu [fai. この皿までゾ食べた。

○与格

・格表示なし

(74) aNsi=nu] tukuma=ta:si=tu aɿ. こんなところ（に）までゾある。

(75) kari]=ta:si]=[tu] nara:si. あいつ（に）までゾ教えた。

(76) agi [uma=ta:si=tu] stirai uɿ. あ、ここ（に）までゾ捨てられている。（ゴミが）

○共格 sui

・格表示のみ（この使用の可否には個人差がみられる）

(77) kari=sui]=ta:si=[tu] appi. あのひととまでゾ遊んだ。（いやな人）

(78) kari=sui]=ta:si=[tu] fai. あのひととまでゾ食べた。（いやな人）

○修飾語

ここにみられるのは狭義の程度の修飾語だけである。修飾語につくのは kami が基本的だが、ta:si の例もわずかにみられる。情態の修飾語のほうは次に取り上げる焦点化になるようだ。

(79) a[tu] tukapStu]=ta:si=[tu] kakaŋ. あと 11 日までもゾかかる。（作業日数）

(80) hjakumaNeN=ta:si¹ kakaŋ=tu sŋ [ja]:. 百万円までもかかるんじゃないかな。（費用）

>e[: hjakumaNeN=kami na]:? え？百万円までもなの？

4. 焦点化

kami の極端な例というとりたての用法は、そこに注目するという点で焦点化の用法に連続するだろう。焦点化は、さまざまな文の部分に焦点をあてた「ほかでもない、まさにそれ、まさにそう」といった意味である。そこに焦点をあてることが目的であって、それ以外との関係＝対比性は表示されてもされなくてもいい。この意味は、琉球諸語に広くみられる焦点化助辞 du に類似するが、大神島方言ではこれに対応する tu も使用される。tu には形式化して焦点化の積極的な意味を失ったような例もみられるが、kami にはまだそのような例はみられないようだ。また、tu には次にあげる当為性の意味もみられない。

この用法での kami の箇所には「まさに」や「間違いなく」などをおぎなう。訳では日本語のノダ形となじみやすいようだ。

○主格

(81) ki:]=ja [ta:=ka=tu] k'isi:taŋ? きょうはだれがゾ来っていたの？

>kari=ka=tu] k'isi:taŋ. あいつがゾ来っていた。

ta:]=ka=tu ka [ju]:? だれがゾなの？（本当にその人か？）

>kari=ka=kami=tu] k'isi:taŋ. (まさに) あいつがゾ来っていたんだ。

(82) [unu ju:=pa: aka=kami=tu turi] kSstaŋ. この魚は（間違いなく）私がゾ取ってきた。

○対格

(83) unu ju:=kami=tu ara: turi] kSstaŋ. (ほかでもない) この魚をゾ私は取ってきたんだ。（ほんとうだ！）

○与格 N

(84) uma=N=kami=tu] ara: uskŋta:. [Nta=Nkai=tu peŋta]re:? （間違いなく）ここにゾ私は置いたんだ。どこに行ったのかな？

¹ 撥音終わりの名詞に母音が続くと渡り音に ŋ があらわれて、hjakumaŋneN に聞こえる。この現象は ~bja:N i:. (bja:ŋŋi:. ~かねえ。) のように池間島方言にもみられる。

(85) uma=N=kami=tu] aḷ kumata. [Nta=Nkai=tu ikatis]se:? (間違いなく)ここにゾあるはずだ。どこにゾ行ったのかな？

○共格 sui

(86) [vva: taru=tu=tu aspi? あなたはだれとゾ遊んだの？

>kari=sui=kami=tu] aspṭaḷ. (まさに)あいつとゾ遊んだんだ。(重ねて、だれなの？としつこく聞かれたとき)

(87) vva]: [taru]=tu=tu [pSsara=N]kai [ikStare]:? おまえはだれとゾ平良に行ったの？

>kari=sui=kami=tu] ikStaḷ. (まさに)あいつとゾ行ったんだ。(重ねて、だれなの？としつこく聞かれたとき)

○共格 sa:ri

(88) [vva: taru=tu=tu aspi? あなたはだれとゾ遊んだの？

>kari=sa:ri=kami=tu] aspṭaḷ. (間違いなく)あいつとゾ遊んだ。

kari=sa:ri=tu] aspi. あいつとゾ遊んだ。(軽く答える)

○動詞完成相

(89) num=kami=tu] staḷ. (間違いなくちゃんと)飲んだ。人称不問

kṛna:] tarube:=ja arata [iciro:=tu=tu num]taḷ. きのはタルベーじゃなくて一郎とゾ飲んだ。

(90) kṛnu: nivvata=kami=tu] astaḷ. きのは(間違いなくちゃんと)寝ないでゾやった。(きのう寝ただろう！と疑われて)

kṛnu: nivvata=tu] astaḷ. きのは寝ないでゾやった。

○動詞継続相

(91) fai=tu uḷ] na:? 食べてゾいるの？

>fai]=tu uḷ. 食べてゾいる。

ma:Nti fai=tu uḷ] na:? ほんとうに食べてゾいるの？

>fai=kami=tu] uḷ. (間違いなく)食べてゾいる！

○動詞意志形

(92) sṇnati:]=kami=tu uḷ. 死にそうだ。(まさに)死にそうなまでの状態だ。(比喩的に力なく言う。私は二日酔いで)

(93) ukamati:]=kami]=tu uḷ. (まさに)いま拝もうとゾしている。(なにしてるの、早くしないと！)に対して言い訳的に言う。今やろうとしてたのに！)

○動詞命令形

(94) vva=ka numi=ti:]=kami=tu us]ke:ḷ. あなたが(まさに)飲むようにゾ(私が)置いてある。(飲んでほしいから。直訳は「あなたが飲め、と」)

(95) numi=ti:]=kami=tu uske:]ḷ. (まさに)飲めとゾ置いてある。(飲むのはあなたでもだれかでもいい。飲めと言ったのも、私でもだれかでもいい。この酒はなに？>だれでも来た人が飲むように置いてあるんだよ。)

numi=ti:=tu] uske:ɲ. 飲めとゾ置いてある。(私でもだれでも、あなたが飲むように)

○形容詞 (対比)

(96) ure:] arata [kuri=ka=kami=tu] masɲ. それじゃなくて、これが(まさに)ゾいい。

(97) uma=juɲ]a [kama=nu=kami=tu taka]kaɲ. ここよりはあそこが(まさに)ゾ高い。

○類似をあらわす形式

(98) jakuza=Nsi=kami]=tu uɲ. (あいつはまるで)乱暴者だ。(怒りっぽい)

jakuza=Nsi]=tu uɲ. (あいつは)乱暴者だ。(怒りっぽい)

(99) kɲu: nakɲ=Nsi=kami]=tu utaɲ. きのは(まるで)夏みたいだった。(冬なのに)

kɲu: nakɲ=Nsi=tu] utaɲ. きのは夏みたいだった。(冬なのに)

○副詞 (情態副詞)

(100) kare: ikS=mai] aNs!i=kami=tu jaɲ. あいつはいつも(間違いなく)あんなふうだ。

kare: ikS=mai] aNsi. あいつはいつもあんなふうだ。

○陳述詞

(101) ma:Nti:=kami=tu] kSstaɲ. (あいつは間違いなく)ほんとうにゾ来た。(＜あいつはほんとうに来たのか？)

ma:Nti:=tu] numi. ほんとうにゾ飲んだ。(飲んだ瞬間)

○後置詞

(102) vva: Nta=u tami=tu] aɲki:ɲ? おまえはどこを向いてゾ歩いているの？

>imma tami=kami=tu] aɲki:ɲ. (まさに)海を向いてゾ歩いている。(imma<*im=ja)

○コピュラ

(103) Nnama: nakS=kami=tu jaɲ. いまは(まさに)夏だ。(なにを勘違いしてるか！)

Nnama:] nakS. いまは夏だ。(ふつうに)

(104) vva=ka tumi:ɲ] muna: [uri=kami=tu] jaɲ. あなたが探しているものは(間違いなく)これだ。

(105) uri=kame:] araN. (まさに)これではない。(絶対にこれは違う)

○対比の例

(106) kɲa:] tarube:=ja arata [iciro:=tu=kami=tu] numtaɲ. きのはタルベーじゃなくて(まさに)一郎とゾ飲んだんだ。

kɲa:] tarube:=ja arata [iciro:=tu=tu num]taɲ. きのはタルベーじゃなくて一郎とゾ飲んだ。

(107) ure:] arata [kuri=ka=kami=tu] masɲ. それじゃなくて、(まさに)これがゾいい。

kare:] arata [uri=ka=tu] masɲ. あれじゃなくて、これがゾいい。

(108) kari=ka=kami=tu] klisi:taɲ. [ure:] ku:tatam. (まさに)あの人がゾ来ていたんだ。この人は来なかった。

(109) ara: saki:=kami=tu] numaN. 私は(まさに)酒をゾ飲まない。(ジュースなら飲むよ。)

(110) ara: saki:jaripa=kami=tu nu]matataɲ. 私は(まさに)酒だからゾ飲まなかった。(ほかなら飲んだけど)

(111) ure: iciro:] =ja araN. [tarube:=kami=tu] jaɲ. これは一郎じゃない。(まさに)タルベード。(写真を見て)

(112) ure:] ki:. [ure: ki:=kami=tu] jaɲ. それはきょうだ。それは(まさに)きょうだ。

文の部分のうち述語の焦点化は、つぎの当為・義務的な意味に連続する。

5. 当為性

焦点化の意味には、「当然そうである、当然そうでなければならない、当然そうしなければならない」といった当為・義務的な意味が連続する。

焦点化では名詞の格形式など、さまざまな文の部分が焦点化の対象となったが、当為性のほうは、基本的に述語部分がその対象となるようである。

当為性には主観的な当為性(思い込み的、自分の判断に自信がある感じ)もあれば、客観的な当為性(客観的な情報に基づいて主観を交えずにそれが当然であると判断)もある。

文のタイプとしては、断定的に肯定、または否定するので、のべたて文が基本であり、たずね文、うたがい文、はたらきかけ文には使用されないようである。ただし、確認文には使用されることがある。また、のべたて文なのでテンス対立があるが、継続相の現在テンスでは *kami* の有無が現場性と関わったり、予定性の *kumata* のあるコピュラ文の過去テンスでは実現しなかったこと(反実仮想的な意味)になったりする。このあたりの詳細については用例を増やしてあらためて検討したい。

この用法での *kami* の箇所には「当然」などをおぎなう。

○動詞完成相

(113) kare: ma:takina=kami=tu num. あいつは(当然)いっしょにゾ飲む。(にぎやかなのが好きだから)

(114) ata=mai ff=kami=tu sɲ. (ずっと降ってるから当然)あしたも降る。(判断材料がある。)
ata=mai ff]=tu sɲ. あしたも降る。(単に)

(115) kare: ku:N]=kami=tu jaɲ. あの人は(当然)来ないんだ。(事情があるから)
kare:] ku:N. あいつは来ない。(単に)

○動詞継続相

(116) k!isi=kami=tu uɲ. (連絡もあったし、もうその時間だから当然)来てゾいる(はずである)。
k!isi]=tu uɲ. (あいつは)来てゾいる。(見て)

(117) nivvi]=kami=tu uɲ. (この時間だから当然)寝てゾいる(はずである)。

Nme] nivvi=tu uɲ. (あいつは)もう寝てゾいる。(見てきて教える。)

(118) uja=Nsi=kami=tu uɲ]. (あいつは)親と似ている。(見なくても、そんなのは当然だ。)

(119) k!isi=kami=tu] utaŋ. (彼は間違いなく) 来ていたよ。(そんなのは当然だ。)

○動詞意志形

(120) numati:=kami=tu] uŋ. [pe:pe:] ku:. (当たり前だ!) 飲もうとゾしている(に決まってるだろ)! 早く来い!(電話で。みんな集まっているし、もうこんな時間だから)

nivva]ti:=tu uŋ. 寝ようとゾしている。(あいつは)

○コピュラ (以下は形式名詞述語の例)

(121) ata=mai kSs kumata=kami=tu] jaŋ. (あなたは) あしたも(当然) 来るべきだよ。(来なかったら大問題だよ!)

ata=mai kSs] kumata. (あなたは) あしたも来ることになっているよ。(予定表を見て。単なる予定)

(122) kari=Nkai=mai panassu as kumata=kami=tu] jaŋ. (おまえは) あの人にも話をすべきだったんだぞ。(それなのにおまえは話をしなかっただろう! どうしてくれる!)

kari=Nkai=mai panassu as kumata=tu] jaŋ. あの人にも話をすべきだった。(単に)

(123) kSs kumata=kami=tu] jaŋ. (当然) 来るべきだった。(なのに来なかった。なんてやつだ!)

kSs kumata=tu] jaŋ. 来ることになってゾいた。(けれど来なかった。単なる予定)

○副詞 (情態副詞) +コピュラ

(124) aNs!i=kami=tu] jaŋ. (当然) そうでゾある。(あなたがそう思うのは当然である。)

aNs!i=tu] jaŋ. そうでゾある。(単に)

以上みてきた用法には、格の終了限界、とりたての極端な例、焦点化、当為性のように意味の連続性、拡張がみられる。当為性の意味はさらに、未来の意味で(一・)二人称に向けられることで、つぎのはたらきかけの用法に移行する。

6. 終止のべたて形によるはたらきかけ文

冒頭の例をあらためて確認する。関連するのべたて文と勧誘形による勧誘文もあわせて示す。

(8) kare: ma:takina=kami=tu] num. あいつは(当然) いっしょにゾ飲む。(にぎやかなのが好きだから) のべたて文の当為性の例

ma:takina=tu] num. (彼は私たちと) いっしょにゾ飲む。のべたて文・非過去

saki:=kami=tu num]taŋ. (まさに) 酒をゾ飲んだ。のべたて文・過去総合形

num=kami=tu] staŋ. (ちゃんと) 飲んだ。のべたて文・過去分析形

(9) ma:takina=kami=tu] num. いっしょにゾ飲もう。のべたて総合形による勧誘

(10) [ma:takina num=kami=tu sŋ. いっしょに飲もう。のべたて分析形による勧誘

ma:takina] numa. いっしょに飲もう。勧誘形による勧誘

kami の、当然そうである、当然そうすべきだ、という当為性は、(一・) 二人称に向けられることによってはたらきかけの用法に移行する。当為性とはたらきかけとの違いは、はたらきかけには人称制限があること、テンス対立がないこと、である。はたらきかけ文の人称は意志の一人称、勧誘の一・二人称、命令の二人称で、三人称はあらわれない。また、はたらきかけ文にあらわれる動作や変化はつねに未来に起こることだが、過去テンスと対立するわけではないので、対立のなかの未来テンスではない。

なお、以下の訳では、焦点化助辞 **tu** に対応させるゾは表示しない。

上の例でみたように述語動詞の形は **kami** の位置によって変わる。述語動詞以外のところに **kami** があれば例(9)のように述語動詞はそのまま使用され、述語動詞に **kami** がつくと例(10)のように補助動詞との分析形になる。

ここで問題になるのは、はたらきかけ文のための語形の一つに勧誘形があつて、それを使用すればふつうに勧誘文ができるのに、なぜ、わざわざのべたて文の形のままで勧誘しようとするのか、ということだろう。結果として、そこには勧誘形による勧誘文にはない微妙なモーダルな違いがあらわれていた。それは聞き手に対する思いやりの気持の表現である。

この用法について話者の説明にあらわれるのは、「相手のことも考えて」や「相手を喜ばせようという気持ちで」といった表現である。この用法には、単に一方的にはたらきかけるのではない、聞き手の気持ちに配慮した、それに寄り添ったはたらきかけの態度、あるいは、なんらかの感情的な要素が、程度の差はあれ、あらわれやすい。

はたらきかけのおもなものは次のようなもので、基本的にはそれぞれ意味に対応した形式が使用される。

- ・意志形 **numati** (一人称) (私は) 飲もう。
- ・勧誘形 **numa** (**numati**) (一+二人称) (いっしょに) 飲もう。
- ・うながし **num=tu mas** (二人称・弱) 飲むといいよ。飲んだほうがいいよ。
- ・命令形 **numi** (二人称・強) 飲め。

このうち、意志形 **numati** の基本的な意味は意志だが、勧誘にも使用される。とくに、**numati** に同意を求める終助辞 **i** がつくと勧誘 (～しようね) を明示することになる。一方、勧誘形 **numa** が意志に使用されることはまれだろうか。うながしは、日本語にも大神島方言にも専用の語形 (総合形、活用形) はなく、組み合わせ形式 (～したらいい、～するといい、など) であらわされる。これらはいずれも単純な意志・勧誘・うながし・命令そのままである。

大神島方言ではこうした形態論的な語形・形式の違いによるはたらきかけムードの区別を、**kami=tu num/num=kami=tu s₁** 文によってもあらわしわけることができる。モーダルな意味の違いは場面によって、あるいは表情や口調などによってあらわしわけられる。

この形式があらわす意志・勧誘・うながし・命令には、なんらかのモーダルな要素が付加される。それは、聞き手への思いやりであったり、外的条件などによる当為性であったりする。聞き

手に直接はかかわらない話し手の意志の用法においてさえ、この形式を使用することで聞き手への思いやりがあらわされることがある。

(125) Nta=N=tu] numatisse:. どこで飲もうかな。

>uma=N=kami=tu] num.

- a) ここで飲もうよ。勧誘。あなたにはここで私といっしょに飲んでほしい。
- b) ここで飲むよ。意志。私はまさにここであなたといっしょに飲みたいから。

上の例は場面によって勧誘になったり意志になったりする例である。どちらにも相手を喜ばせようという気持ちがふくまれる。次の例はうながしと意志の例である。

(126) Nki=kami=tu] sɿ. (動詞の分析形)

- a) もう帰ったほうがいいよ。遅いからもう帰きなさいね。うながし
- b) 帰るよ。もう帰らなくちゃ。誘われたけど仕方なく断わる。意志

(127) niv=kami=tu] sɿ. (動詞の分析形)

- a) もう寝ようね。寝たほうがいいよ。うながし
- b) もう寝るよ。意志

6.1 勧誘 numa (numati) (一十二人称)

(128) ma:takina=kami=tu] num. いっしょに飲もう。=例(9)

ma:takina] numati. いっしょに飲もう。意志形による勧誘

uma=N] numa. ここで飲もう。勧誘形による勧誘

(129) ata=mai] ma:takina=kami=tu ikɿ. あしたもいっしょに行こうね。

ma:takina [ika. いっしょに行こう。勧誘形による勧誘

(130) ata: kitati] munu:=kami=tu fau. あしたは違うのを食べようね。(どう?と相手の気持ちを考えて言う。)

ata: kitati] munu: [fa:. あしたは違うのを食べよう。勧誘形による勧誘

(131) nau=ju=tu] aɿri:ɿ. [uma=N=kami=tu] numi:ɿ. なにを言ってるの、ここで飲んでいよう。
(もう帰ろうかな、に対して)

(132) kama=N=kami=tu] mi:ɿ. あそこで見よう。

(133) mi:]=kami=tu sɿ. 見よう。(動詞の分析形)

(134) fau=kami=tu] sɿ. 食べようよ。(遠慮しているような人に、少し強引に誘う。)(動詞の分析形)

6.2 うながし num=tu mas (二人称・弱)

(135) ma:takina=kami=tu] panasɿ. (あなたはあの人と) いっしょにおしゃべりしたほうがいいよ。

ma:takina] aspɿ=tu mas. いっしょに遊んだほうがいいよ。

(136) ma:takina=kami=tu] aspɿ. いっしょに遊ぶんだよ。(仲良くね。子どもへのうながし)

(137) unu] ɿwu:=pa: [ni:ta]=kami=tu jakS/jakɿ. この魚は煮ないで焼いたほうがいいよ。

(138) sta=Nkai=kami=tu] uskɿ. (上にのせないで) 下に置きなさい。(相手のことも考えて、そのほうがいいよ、という思いやりの気持ちがある。)

(139) ja:=Nki=kami=tu] nivvi:ɿ. 家に行って寝ていなさい。(疲れているんだからそのほうがいい。)

(140) Nki=kami=tu] sɿ [i:. もう帰ろうね。(帰ったほうがいいよ。酔っている人に。)(動詞の分析形)

6.3 命令 numi (二人称・強)

うながしと命令は連続していて、場面によって、また口調などによってあらかし分けられる。

(141) vva=mai=kami=tu] num. あなたも飲みなさい。(当然飲むべきだ。当為性に連続)

vva=mai] numi. おまえも飲め。(単純命令)

(142) Nmepi:ma:] mati=kami=tu uɿ. もう少しは待ってろ。(どこにも行くな。)

jozi=kami] uma=N mati:ri. 4時までここで待っている。

6.4 意志 numati (一人称)

はたらきかけ性が一人称に向けられると意志の用法になる。日本語でも「飲もう」は二人称に向けられれば勧誘になり、一人称に向けられれば意志になる。num (飲む:終止, のべたて, 断定, 非過去) は基本的には一・二人称以外の意志性のないのべたて文に使用され, 予定性の kumata との組み合わせで人称不問ののべたて文になる。

(143) ma:takina=kami=tu] fau. (私はみんなと) いっしょに食べよう。

uri:] fa:ti. これを食べよう。意志形による意志の文

karika=tu] fau. あいつが食べる。のべたて文

fau] kumata. 食べる (ことになっている)。予定性, 人称不問

(144) ma:takina=kami=tu] num. (私はみんなと) いっしょに飲もう。

(145) ara: niv=kami=tu sɿ] Nme. 私は寝る, もう。(動詞の分析形)

(146) pi:maka:=ja uma=N=kami=tu] numi:ɿ (<nimi uɿ). もう少しはここで飲んでいよう。

(147) uma=N=kami=tu] mati:ɿ. (私は) ここで待っていよう。(だからあなたは出かけていいよ。)

(148) mati=kami=tu] uɿ. 待ってるよ。(私はどこにも行かないよ。だからあなたは出かけていいよ。)

◇付録1 近隣方言に関する辞典、研究書等にみられる関連項目

本稿の内容に関連する部分のみを記載する。

●方言辞典等

『狩俣方言の世界』佐渡山正吉（2014） 時空格 ガミ ウガンガミ大神まで，ピサラーミ平良まで

『宮古伊良部方言辞典』富浜定吉（2013） 時空格・とりたて ガイ，時空格 ターチ

『佐良浜方言語彙辞典』上地徳男（2021） 時空格・とりたて ガミ，ターヒー

『たらまふつ辞典』下地賀代子・多良間村教育委員会（2017） 時空格・とりたて ガミ

『みんなふつ語彙集』セリック・ケナン，大浦辰夫（2022） ガミ ①～まで②～は。対比を表わす。

●『南琉球宮古語伊良部島方言』下地理則（2018）くろしお出版（日本語訳のみに加工）

4. 3. 9. 限界格 =gami p.131

・「1年生から中学生まで gami ブラっとそろって勅語といった。

・いつまで gami も健康で，長生きしないとね。

英語版ナシ・対比：（私は知らないが）老人たち gami は知っているだろう。

10. 2. 7. 対比 =gami p.241

・「あんたも佐和田にいたの？」 「（他の人は別として）私 gami は長浜に来ていたの」

・「もう，何を食べたか，そういうのも分かるわけないでしょう。お金がある豊かな者たち gami は，なんでも食べるだろうけど，私たちは（生活が）つらかったから。」

・「蛇じゃなくて，針 gami だよ。」

10. 2. 2. 排他 =tjaaki「だけ」 p.238

「そいつをだけ tjaaki 叱ったんだよ。」

「そいつだけ tjaaki を叱ったんだよ。」

英語版：お前だけで行くな。

●池間島方言（伊良波盛男氏への聞き取り調査から）

・空間 gami, ta:hi:

uma=gami ここまで

uma=ta:hi: ここまで

・時間 ta:hi:（時間の限界に gami は使用しないようだ。）

jusarabi=ta:hi: uma=N uri. 夕方までここにいる。

saNzi=ta:hi:=ja ku: jo:. 3時までには来いよ。

saNzi=ta:hi:=nna ku: jo:. 3時までには来いよ。（saNzi=ta:hi:=nna < * saNzi=ta:hi:=N=ja）

saNzi=nna ku: jo:. 3時までには来いよ。（saNzi=nna < * saNzi=N=ja）

・マデとりたて ta:hi: (gami は不可)

sara=ta:hi:=mai fai ssi=baka:i ja:sɿmunu atai. 皿までもたべているほどにひもじかった。

・その他の用法（gami も ta:hi: も不可）

sqnaddi: hi: ui. 死にそうだ。死のうとしている。意志形+シテイル

kju:=ja h!itumi numadi. きょうはいっしょに飲もう。意志形

◇付録2 日本語のスルによるはたらきかけの用法

日本語動詞の終止のべたて断定非過去形（スル形）によるはたらきかけの例をあげておく。

・勧誘（終助辞ゾ・ヨ）

気にする必要ねえよ！ ほら、さっさと帰るぞ！ http://www.takuyo.co.jp/products/himehibi/himehibi_miniss1.html

サツキ「そろそろ帰るよメイ」 <https://bokete.jp/boke/88042311>

・うながし（いますぐでも未来でも。ノダ形+終助辞になりやすいか。）

友達にはやさしくするんだよ <https://note.com/hanex/n/n20fb7e1467c0>

「あのね、いい大人はそんなことはしないんだよ」と後ろの夫が言う。 https://twitter.com/tea_itsuko

これに懲りたら今度から真面目に授業を受けるんですよ <http://eternalking.blog.2nt.com/blog-entry-93.html>

今度から真面目に授業受けるんだぞ／うん！気をつけるよ <https://novel.prcm.jp/novel/N0yx6h9U3xsqAH0kOIg4/chapter/hy7qfzjBN5NlyxmETbr9>

・命令（いますぐ。終助辞ナシ）

ほら、さっさと食べる。片付かないでしょ <https://www.117.co.jp/sft/works/entry-43254.html>

さっさとやって、とっとと帰る！ <https://jp.mercari.com/shops/product/jhiXRvWJpUNmAYEjGdLM7W>

・意志

今度こそ絶対に勝つ <http://apg.blog3.fc2.com/blog-entry-676.html>

今日も1日仕事をがんばるぞ！ <https://gakumado.mynavi.jp/freshers/articles/46541>

本書は以下の共同研究プロジェクトで発行されています。

国立国語研究所機関拠点型基幹研究 「開かれた言語資源による日本語の実証的・応用的研究」

- 基幹型プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」サブプロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」（代表：五十嵐陽介）
- 基幹型プロジェクト「消滅危機言語の保存研究」（代表：山田真寛）

日琉諸語の記述・保存研究Ⅲ

2025 年 1 月 27 日発行

編者 大島 一、セリック・ケナン、五十嵐陽介、山田真寛

発行 国立国語研究所 研究系

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2

TEL. 0570-08-8595（ナビダイヤル） FAX 042-540-4333
